最強銀河究極ゼロ　異世界のブレイヴ使い

ルノア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしキリガに回収される前に蟹座と獅子座以外の裏十二宮の誰かが目覚めて広い宇宙に旅立ったら。

そんなもしものお話。

ＵＰ主が射手座が大好きだから作った欲望の塊のような話です。

それでも感想や評価してくれるとうれしいです。

目次

紅き焔の光導使い ―― 1
目覚めない射手座のカード ―― 3
ギルドと三羽鴉 ―― 9
ギルド突入！目覚めた射手座のカード ―― 15
暁の明星 ―― 19
ＵＫＮＯＷＮ　ＥＧＧ ―― 33
銀河七将とのバトル ―― 38
宇宙船入手 ―― 45
グリーンスムージ到着！ゴリラ狩り ―― 50
新たなアルティメット　深緑の一太刀！ ―― 56
アルティメット使いＶＳアルティメット使い　白と赤の衝突 ―― 64
決着　紅白の激闘 ―― 71
一番星と流れ星の激突 ―― 76
決着　一番星ＶＳ流れ星 ―― 82

紅き焔の光導使い

目が覚めると俺の前には暗闇を切り裂くような光が見えた。
俺はそれに向かって飛び込んだ。
するとそこには紅色の焔に包まれた自分の体があった。
自分の体といっても今まで見たこともないような体だ。
だが直感的にわかったこれは自分の体だと。
「俺はこんな暗闇からは出てやる！」
俺はいつもいつも何度見ても何も見えない暗闇から逃げ出したかった。
俺があきらめて目を閉じたときあの光が見えた。
そして俺はその光にここから出ていけるという希望と望みを託して光に飛び込んだ。
そして目の前にあった体に俺は飛び込んだ。
すると俺の望みがかなったのだろう。
俺の今の体は目の前の体に吸い込まれて俺はその体で動けるようになった。
「よしゃぁぁぁぁ!!!!!」
俺は自由になったことに喜びを感じ雄たけびを上げた。
そしてよく見ると本棚が並ぶ大きな図書館の中だったらしく俺は雄たけびを途中でやめた。
「おぬしは異次元からの侵略者！」
どうやら後ろに人がいたらしい。
というか、異次元からの侵略者？
バトルスピリッツは自由になってもやるつもりだがそんな仕事は俺はしないぞ。
とりあえず俺は後ろを振り返った。
するとそこにいたのは白くて長いくて顔の半分以上を髭で隠したおじいさんがいた。
そしておじいさんはおもむろにデッキを取り出しこちらにかざした。

「ターゲット！わしが勝ったら貴様は裏銀河文書に帰ってもらう！」
「はぁ？あんな暗闇の中に帰ろだと？無理だね。」
俺はデッキを相手にかざし勝った時の報酬を言った。
「俺が勝ったらこの世界のことを教えろ！」
そして俺とおじいさんは開戦の言葉を口にした。
「「ゲートオープン！解放！」」
そうすると俺たちの体は別空間に飛ばされた。
するとそこには宙に浮くおじいさんと黒をベースに金と赤で彩られた鎧が俺の黒いコートの上からかぶさって真ん中の十字の模様の中に５つの光るライフというものがあった。
「俺の先行、スタートステップ！ドローステップ！メインステップ！俺は光り輝く大銀河を配置！」
俺がカードをフィールドに置くと後ろの空間に光り輝く星々がある宇宙が広がった。
「これで俺はターンエンド！」
ソロア
手札４枚
リザーブコア０個
トラッシュコア４個
「わしのターン！わしはアドリアンを召喚、さらにガイウスを召喚しバーストセットターンエンド。」
プラトン
手札３枚
リザーブコア１個
トラッシュコア２個
へぇー宣言しなくても増えたりするのか便利だな。
「射手座のターン！龍神の弓！天馬の矢！戦の嵐を沈めよ！光龍騎神サジットアポロドラゴン召喚！」
俺がカードをフィールドに置くと空から龍の上半身から馬の首から下が生えた巨大な龍が現れた。
「さぁ、行くぜ！」

目覚めない射手座のカード

「アタックステップ！サジットでガイウスに指定アタック！」
俺の命令を受けたサジットは弓矢を取り出しその矢をガイウスに向けてはなった。
ＬＥＶＥＬ１ＢＰ６０００光龍騎神サジットアポロドラゴン
ＬＥＶＥＬ１ＢＰ１０００光の戦士ガイウス
その矢はガイウスを貫きガイウスは破壊された。
「ターンエンド！」
ソロア
手札４枚
リザーブコア０個
トラッシュコア４個
「わしのターン！わしは光灯る三叉灯台を配置。」
プラトンがネクサスを配置するとプラトンの後ろから灯台が出てきた。
「三叉塔の効果によりわしはバルカンアームズをノーコスト召喚維持コストはアドリアンから確保。」
三叉塔の３つの光が重なったと思うとそこからバルカン砲を両脇に装着したキャタピラーが出てきた。
「これでわしはターンエンド。」
プラトン
手札３枚
リザーブコア０個
トラッシュコア５個
「射手座のターン！」
そして俺はデッキから１枚引くと絵柄のないカードを引いた。
「どういうことだ？俺のキーカードでもある射手星鎧が使えない？」
俺は自分が引いたカードに疑問を感じながらステップを移行した。
「俺はイグアバギーを召喚、さらにダンデラビットを召喚。」
すると目の前の大きな円状の大地に緑色のイグアナと４輪のタイ

ヤを合わせたような生物とニンジンを咥えた兎が現れた。
「ダンデラビットの召喚時効果によりボイドからリザーブにコアを1個さらに系統星魂を持つスピリットがいることによりイグアバギーにコアを1個おく。」
　コアが入ったことによりイグアバギーは燥ぎだした。
「さらに俺はブレイブドローをしよう、２枚引きデッキの上から３枚オープン。」
　オープンしたカード
　六分儀剣ルリオーサ
　騎士王蛇ペンドラゴン
　ブレイブドロー
「俺はペンドラゴンを手札に加える。」
　俺がペンドラゴンを手札に加えた瞬間、手の甲に蛇のような痣が浮かび上がったてきた。
「なんだこの痣は？」
　俺が疑問を抱え痣を見ていると痣は次第に消えていった。
「さっきの痣が何かは気になるが今は目の前の自由だ。」
　俺は敵を見直しステップ移行を行った。
「アタックステップ！サジット、バルカンアームズを射抜け！」
　俺がそう言うとサジットはアドリアンに向けて矢を放った。
　ＬＥＶＥＬ１ＢＰ６０００光龍騎神サジットアポロドラゴン
　ＬＥＶＥＬ１ＢＰ５０００バルカンアームズ
　バルカンアームズに向けて放たれた矢はバルカンアームズを貫き敵を破壊した。
「これで俺はターンエンド！」
　ソロア
　手札４枚
　リザーブコア０個
　トラッシュコア５個
「わしのターン！リボルアームズ２体を召喚」
　地面に青色のカードが浮かび上がるとそこからレーザー砲に羽の

ついた飛行物体が出てきた。
「リボルアームズの召喚時効果発揮、三叉塔にコアを合計４つボイドから置く。」
　リボルアームズから排出されたコアは三叉塔に入っていき三叉塔の光を一層強くした。
「わしは光の騎士ホープを召喚！」
　地面から青いカードが出現しそこから剣を握った巨人の少年が出てきた。
「さらにわしはリボルアームズをホープにブレイヴ！」
　プラトンがホープの上にリボルアームズを重ねた。
　するとホープの腕にリボルアームズが装着された。
「アタックステップ！ホープでアタック！リボルアームズの合体アタック時効果コスト４を指定指定されたコストのマジックはこのバトルの間、使用できない。」
　ホープがこちらに剣をむけると俺のデッキの上のカードが２枚破棄された。
「さらにホープの効果により粉砕で２枚破棄、さらに強襲発揮、三叉塔を披露させ回復！」
　破棄されたカード
　六分儀剣ルリオーサ
　ブレイブドロー
「ライフで受ける！」
　目の前に青いエネルギー状の壁が出てくるとホープはそこめがけてエネルギー弾を放った。
　ソロア
　残りライフ４個
「ホープさらに追撃！粉砕発揮！」
　破棄されたカード
　光り輝く大銀河
　双翼乱舞
「ライフで受ける！」

ソロア
残りライフ３個
「わしはこれでターンエンド！」
プラトン
手札０枚
リザーブコア０個
トラッシュコア８個
「射手座のターン！騎士王蛇ペンドラゴンを召喚！」
地面に紫色のカードが浮かび上がりそこから紫色の機構蛇が現れた。
「召喚時効果発揮！ホープのコアを２個取り除く！」
ペンドラゴンの眼が怪しく光るとホープは突然苦しみだし消滅した。
「俺はサジットにペンドラゴンをブレイヴ！」
俺はサジットにペンドラゴンを重ねた。
するとペンドラゴンは自身の体を剣に変えサジットはそれを握った。
「バーストセット、サジット、アタック！」
サジットが握っているペンドラゴンを一振りするとリボルアームズは消滅した。
「ペンドラゴンの合体アタック時効果リボルアームズのコアをリザーブに。」
「ライフで受ける！」
プラトンの前に赤い障壁が現れるとそこめがけてサジットは炎のブレスを放った。
プラトン
残りライフ４個
「俺はこれでターンエンド！」
ソロア
手札４枚
リザーブコア０個

トラッシュコア3個
「わしのターン！こいオライオン！」
突然地面に雷が落ちたかと思うとそこから猟銃を持った大きな巨人が現れた。
「召喚時効果発揮！お前のデッキから12枚破棄！」
破棄されたカード
光輝龍神サジットアポロドラゴン
刃狼ベオウルフ
ブレイヴドロー
双翼乱舞
光り輝く大銀河
武槍鳥スピニードハヤト
マジックブースト2枚
絶甲氷盾2枚
魔導双神ジェミナイズ
輝龍シャインブレイザー
「残りデッキ枚数15枚か、だがこれでお前の手札はゼロ、俺の勝ちだ。」
俺はこの瞬間勝利を確信した。
「戯言をぬかすな！これでターンエンド！」
プラトン
手札0枚
リザーブコア0個
トラッシュコア6個
「射手座のターン！牡羊星鎧アリエスブレイブを手札からサジットにブレイヴ！」
空に牡羊座の紋章が描かれるとそこから樋爪が地面を踏み鳴らす音が聞こえた。
「何、ダブルブレイヴじゃと!?」
「自分の分身が使えないのは残念だが、勝つためにはまってなんていられない。」

上空に出現していた黒い雲から緑色の羊が飛び出した。
そして空中で体を分解してサジットに着せるようにブレイヴした。
「サジットでアタック！アタック時効果ＢＰ１００００以下の相手スピリットを１体破壊！」
サジットは弓を顕現させるとペンドラゴンを矢の代わりにしオライオンに放った。
ペンドラゴンに射抜かれたオライオンは破壊された。
「フラッシュタイミング！バーニングサン！手札のカノン・アームズをブレイブしサジットは回復！」
「それでも３点このままでは私はたおせんぞ！」
カノン・アームズを腕に装着したサジットはそのままプラトンに銃口を向けた。
「まだだ！フラッシュタイミング光り輝く大銀河に効果により手札の魔導双神ジェミナイズを破棄しＢＰ６０００追加さらに赤のシンボル１つ追加！」
光り輝く大銀河から降り注いだ隕石はサジットが放ったエネルギー弾と一体化しプラトンめがけて発射された。
「なんだと一気にライフ４点だと！」
プラトン
残りライフ０個

ギルドと三羽鴉

「それじゃ、プラトンお前から必要な情報をもらう」
俺はプラトンに手をかざした。
するとプラトンからとてつもない量の文字列が俺の手の中に入っていった。
「へえ、面白いことになってるなこの世界は」
必要な情報を渡したプラトンはすぐに幻のように姿を消した。
「とりあえず船を手にれるか」
そうしてこの星の港までたどり着いた。
「へい、そこのアンちゃんｙｏ、俺たちにデッキを譲ってくれないか？」
話しかけてきたのはゴーグルをつけたラップ口調で話しかけてくる男だった。
「その姿、ギルドの三羽鴉か、ちょうどいいターゲット」
俺がデッキをかざすとその男の腰にあったデッキケースが光った。
「おれっちがギルドと知っておきながら勝負を挑むとはとんだ怖いもの知らずだｙｏ」
「ゲートオープン解放」
そして第６ターン目
「いけプレアデスロックドラゴン」
イフリートとアリエスブレイヴのおかげでシンボル５つになったプレアデスロックドラゴンはいともたやすく敵のライフを打ち砕いた。
「ＮＯ～！」
ライフを一気に５つ削られた敵であるツルハシはライフが０になりバトルフィールドから追い出された。
「それじゃ、ほかの鴉のとこに案内してもらうか」
そいって今度はワタリのとこに案内させた。
「ターゲット！」
出会いがしらに勝負を挑み。

第9ターン
「いけジャッジメントドラゴニス！」
ジャッジメントドラゴニスの効果でもう一度自分のターンを行い相手にバーストのない状況で総攻撃を仕掛ける。
「くっ、ブロックです！パラガン先生！」
ジャッジメントドラゴニスはいともたやすくパラガンを踏み砕いた。
「止めだ、ドルクスウシワカ！」
ドルクスウシワカは滑空しながらワタリに突っ込んでいった。
「ライフで受ける！」
ワタリ
ライフ1→0
「じゃぁ、今度は私かしら」
バトルフィールドから出るとそこにはすでに最後の標的ハシブトがいた。
「それじゃぁ、仲間の敵とらせてもらうはよ！ターゲット！」
そしてバトルフィールドに飛ばされた。
その時に何か俺の中に侵入したような気がしたがほっておくことにした。
バトルフィールドにたどり着いたことを確認すると俺は目を開けた。
するといつもとは違う白色の機械のようなバトルフォームに包まれていた。
「こんなバトルフォームいつの間に手に入れたんだ？」
悩んでいても仕方ないので4枚デッキから手札にするため引くとすべて白色のカードだった。
「はぁ、なんで白なの俺の赤緑は？」
嘆いているとハシブトに先行を取られてしまった。
「私のターン、おいでデモボーンちゃん」
ハシブトの場に剣と盾を持ったスケルトンが現れた。
「私はこれでターンエンドよ」

ハシブト
リザーブコア　1
トラッシュコア　1
フィールド
デモボーン1体
というかなんで白なんだよ。
白なんてデネボラのデッキ1度貸してもらったぐらい、アレ俺ってずっとあの暗闇の中に
何故だ‥‥‥ 頭が割れそうに痛い。
これは何かある、だが
「今はこのバトルに勝利することが最優先だ。氷魔のターン！」
そう言ってデッキの1番上を引くとなんとアルティメットだった。
そしてその瞬間、頭の中に直接話しかけてくる存在がいた。
「わが名は、究極巨神アルティメットトール」
「なんでお前が俺のデッキの中にいる？」
「我は貴様に従うことにしたそれだけだ」
「ということはこき使っても文句は言うなよ」
「承知した」
トールとの短いやり取りを終えた、俺は意識をフィールドに戻した。
「こい、オートマチックガンナー！」
俺がフィールドにカードを置くと目の前に広がる闘技場のような円形のフィールドから二足歩行の球体から銃身がでた起動兵器が現れた。
「さらに俺は手札からネクサス、ローガルド北方司令部を配置！」
俺の後ろにはいくつもの兵器を装備した巨大な建物が現れた。
「さらに俺はバーストをセットターンエンド！」
ソロア
リザーブコア　0
トラッシュコア　4
フィールド

オートマチックガンナー1体
「私のターン、冥闘士バラム出番よ」
ハシブトのフィールドには新たに拳に炎をまとった戦士が現れた。
「アタックステップ!デモボーンちゃんレッツゴーよ」
「ライフで受ける!」
ソロア
ライフ5→4
「ライフ減少後バースト、ロードドラゴングレイザー降臨!」
目の前に吹雪が吹き荒れたかと思うとそこから青色の鎧を着た白いドラゴンが現れた。
「それなら私はターンエンドよ」
ハシブト
リザーブコア　1
トラッシュコア　2
フィールド
デモボーン1体
冥闘士バラム1体
「氷魔のターン、さぁトール出番だぜ!オートマチックガンナーのスピリットソウル発揮!」
「何が来ても私の呪撃の前では無力よ!」
「黄金に輝きし機構の巨人よ、その一撃ですべてを薙ぎ払え!究極巨神アルティメットトールＬＥＶＥＬ４で召喚!」
突然地面が開いたかと思うとそこから現れたのは何とアルティメットトールだった。
「不足コストはオートマチックガンナーから確保!アタックステップ!いけトール!アルティメットトリガーロックオン!」
俺が指先をハシブトに向けるとハシブトのデッキの上から1枚がオープンされた。
「さぁ、コストを答えな」
「コスト3ルーンマスターナーガ」
「ヒット!これでトールはスピリットからブロックされない」

「ライフで受けるわ」
ハシブト
ライフ5→4
「これで俺はターンエンド」
ソロア
リザーブコア　0
トラッシュコア　3
フィールド
究極巨神アルティメットトール1体
爆氷の覇王ロードドラゴングレイザー1体
「私のターン、幽霊船長シルバーシャークを召喚！」
怒っているのかハシブトはさっきまでの気持ちの悪いおねぇ口調を止め仏にしゃべり始めた。
「アタックステップデモボーン行きなさい！」
「トールの効果をしよう！相手のレベル2以下のスピリットがアタックしたとき回復する！」
「うそ！」
「トールでブロック！」
「でもこれで呪撃が「残念、トールのカテゴリーはアルティメットだ！」
破壊されてしまったデモボーンは魂になってトールに絡みついたがトールは蜘蛛の巣を払うがのごとく腕をふるうと魂は霧のように消えてしまった。
「クッ！ターンエンド」
ハシブト
リザーブコア　0
トラッシュコア　3
フィールド
幽霊船長シルバーシャーク1体
「氷魔のターン！オートマチックガンナー2体を召喚、アタックステップ！トールでアタックアルティメットトリガーロックオン！」

「コスト4ブリュナグオン」
「ヒット！そしてフラッシュタイミング、ドリームチェスト！デッキの一番上に戻れシルバーシャーク」
「ライフで受ける」
ハシブト
ライフ4→3
「総攻撃だ！」
「ライフで受ける」
ハシブト
ライフ3→2→1→0
そのままハシブトはバトルフィールドから叩き出された。
「これが氷魔の力！」

ギルド突入！目覚めた射手座のカード

バトルに勝った俺はハシブトに望みを伝えた。
「俺をギルド本部まで連れて行ってくれ」
「あんた正気!?本部は私たちじゃ、足元にも及ばない化け物ばかりよ!?」
「そうだＹＯ！絶対に別の事にした方がいいＹＯ！」
「そうだぜ旦那、やめといた方が身のためだぜ」
（まさか３人そろって否定するなんて思ってもなかったぜ）
内心でそう思いながら俺はそこまで言わしめる強者がどんなものか見てみたかった。
「そこまで言うなら尚更だ。連れていけ、それが勝った者の権利だ」
俺がそう言うと３人は渋々、船の中に入れてくれた。
中を見てみると操縦席の前にデッキが置けそうな場所があった。
「なぁ、ここにデッキを入れて船のエンジンを動かすのか？」
「そうだぜ旦那こういう風に置くと」
ワタリがデッキを置くとデッキはそこに吸い込まれていった。
それと同時にエンジンがかかる音が聞こえた。
「こんな風にエンジンが動くんだぜ。ちなみにデッキは帰ってくるから安心していいぜ」
「そうかなら俺のデッキを入れたら」
興味本位でデッキを入れるとさっきよりものすごい音たてながらエンジンが回り始めた。
「おい旦那、あんたのデッキどれだけ強いんだよ」
驚きとあきれの顔でワタリがこっちを見てくる。
「そんなことどうだっていいじゃぁんか、行こうぜギルド本部」
３羽鴉はいつもより勢いのいい船の運転に戸惑いながらもギルド本部まで船を走らせた。
ギルド本部は見れば一発でわかるぐらい奇抜なかっこをしていた。
「あれ、だれの趣味だよ」
「俺らのボスの趣味だ」

何とも分からない趣味である。
「そうなのか」
俺は戸惑いながらも合図地をうった。
そんなこんなしているうちに船はギルド本部内部に入って行った。
「ここが我らがギルドの本部だＹＯ！」
中は外とは違って結構普通の作りになって行った。
「外とはえらい違いだな」
俺が感想を述べながら船を降りると青髪で褐色肌の少年と眼があった。
するとデッキがいきなり動き始めた。
「どういうことだ？」
俺は不思議に思ってデッキケースを開けるとカードが1枚青髪の少年めがけて飛び出していった。
青髪の少年はそれをキャッチするとこちらに返してくれた。
「これは君のカードだろ大事にしたまえ」
俺は受け取ってカードを確認すると光輝龍神サッジトアポロドラゴンだった。
さらにこのカードはこいつと一緒にいたいとでもいうばかりに光り輝いている。
「このカードあんたにあげるよ。大事にしてくれよ」
俺はそれだけ告げ歩き始めた。
「さ―て、面白いこともあったしそろそろこの痛みどうにかするか」
さっきからずっと蛇のような腕の痣が疼くのである。
しかもこの痛みは多分目的の場所に近づくほど増していく。
俺は痛みを我慢しながら痛みが増していく方に歩を進める。
「はぁ、ここか」
俺は痛みで意識が飛びそうになるのを何とか耐え、
おもっきり目の前の扉に拳をたたきつけた。
すると扉は壊れ飛んでいきはしないがその場に倒れた。
「ずいぶん手荒な入室だね」
扉の中に入った先には黒いローブに身を包んだ少年だった。

「そうなのか知らなかったぜ。なにせ記憶があいまいだからな」
手にあった痣はもう首元まで足していた。
「おかっしいな、その毒を受けてそこまでの状態なのに動けるってどういうこと？」
「思い出した、その言葉で思い出した。俺は蛇遣い座の毒を受けたんだ」
そして俺はそのままあの暗い場所に落とされた。
さらにあそこは落ちた者の記憶をくらうという趣味の悪い仕掛けだった。
「どうする、ネイクス？」
少年は指輪にネイクスと呼びかけたすると指輪から巨大な蛇が現れた。
「私がこやつを喰らう、さすれば１２級の内の２枚が手に入る」
「なるほど、いい考えだね。よしそれにしよう」
巨大な蛇は俺めがけて巨大な咢をむけて襲い掛かってきた。
だがそれを俺は力任せに地面にたたきつけた。
「なにどこにそんな力が！」
「さぁ、俺にもわからない？」
なぜか湧き上がるように力がわいてくる。
俺が蛇を押さえているとデッキケースが光り始めた。
さらに俺が来ていた黒いコートが燃え上がり中から赤と金の鎧が出現した。
「その姿！まるで昔のお前ではないかまさか力を取り戻したのか!?」
俺はそのまま蛇を蹴り飛ばすとデッキケースを開いた。
すると俺の目の前に今まで色を失っていた射手座のブレイヴが色を取り戻し飛び出てきた。
さらに今まで体を這うように有った痣が燃え上がってきれいさっぱりなくなっていた。
「どうやら毒は、なくなったみたいだし船だけもらうぜ」
俺はそう言ってもと来た場所まで走って行った。
この基地の港にたどり着いた俺は一番近くに有った三羽鴉の船を

パクリ宇宙へ飛び出しって言った。
「また会ったらバトルでもしようぜ」
　そのまま全速力でプラトンからもらった記憶にある船の星まで船を走らせた。

暁の明星

俺は船が買える星まで盗んだ船を使いむかっていた。
「3羽鴉にはひどいことしちまったな」
少しだけこの船を盗んだことを後悔しながら目的地まで船を走らせた。
「そういや、毒はきれいさっぱり燃やし尽くしたようだけど。
さすがにこのかっこで出歩けるほど俺の頭は狂ってねーからな」
多分、デネボラならお構いなしに堂々と歩いてるだろうな。
そんなデネボラの姿を思い浮かべて少し微笑んだ。
すると船にメールが来た。
船の機械を操作し船をオート操縦にし目の前に見えるように電子パネルに映し出した。
パネルに映し出されたのは白髪で黒い仮面をつけた少年だった。
「やってくれたね、ソロア」
「少年。悪いことは言わないからネイクスとは縁を切った方がいいぜ」
「なぜだい？ここまですごい力が手に入ったんだ。縁を切るなんてとんでもない」
「お前ネイクスの事分かってないな。まぁ、いいや。そこまで行ったんだ後悔するなよ少年」
「僕は少年なんかじゃない！キリガやレイにだって引けを取らない！」
「そうか、なら名前を教えな。その名前をキリガとレイとかいうやつに会ったら伝えといてやるよ。
お前の知り合いが道を無味はずしそうになってるてな」
「僕の名前はミロク。いずれ、この全宇宙を僕が支配する」
「覚えた。あと3羽鴉には新しい船、与えておけよ。
盗んだ奴が言うのもなんだが、ちょっとだけかわいそうだからよ」
俺がそう言うとミロクは返事も返さず通信を切った。
心の隅で少し3羽鴉の心配をしながら目的地まで船を飛ばした。

ミロクとの通信から２０分ぐらいで目的地の星に着いた。
「ここが船の星か。とりあえず片っ端から店、まわっていい船見つけたらバトルして値下げしてもらうか」
「決断すれば即実行！」がタウロンのもっとうだったかな。
昔の友人の言葉を思い出しながら最初に目に入った店に入って行った。
「おい、てめぇー！俺のカードが傷ついちまったじゃないかどうしてくれるんだぇぇ！」
「兄貴のカードはすべてがレアカードなんだぞ！」
店に入って初めに見た光景は屁理屈をつけている不良ぽい２人だった。
「おい。お前らその人、困ってんだろ。それに周りの人にも迷惑だ」
「なんだと貴様、兄貴が邪魔だっていうのか!?」
「あぁ。邪魔だ。不法投棄された生ごみなみに邪魔だ」
「なんだと貴様！」
俺が本音を告げると兄貴と呼ばれている男が声を荒げてやってきた。
「ターゲット！二人まとめて来な。すぐにかたをつけてやるよ」
俺が白のデッキケースを掲げると横から黄色のデッキケースが出てきた。
「ターゲット！君、善行はいいことだがあまり自分の力を過信しないほうがいいぞ」
黄色のデッキケースの持ち主は長い金髪の少女だった。
それに付け加えてまっすぐな瞳。
そして出るとこは出て閉まるとこは締まっている体。
（もろ、タイプだ）
「失礼だが名前は？」
俺が質問すると金髪の少女は堂々と名前は言った。
「私は明の明星のエリスだ。君は？」
「俺の名前はソロア・サジタリオス。ゲートオープン解放！」

俺がフィールドへと旅立つ言葉を叫ぶと俺たち４人はフィールドへと飛ばされた。
今回は白のデッキをチョイスしたためにバトルフォームは機械を身にまとったような姿になっている。
敵は２人ともへたくそな字で漢と書かれた鎧を着ている。
それに比べてエリスのバトルフォームは魔法少女のようなローブである。
「なんていうか。俺が今まで知らない単語がプラトンからもらった記憶の中にあるんだ？」
まぁ、知らないのも当たり前だが一応見てみるか。
その単語の意味を記憶の中から引きずり出してみた。
それは、なんというかとても老人の趣味とは思えないようなものばかりである。
「俺様の先行！ディノニクソーを召喚」
プラトンの記憶に謎を抱いていると敵に先行を取られてしまった
「さらに俺はダークゴラドンを召喚しターンエンド」
ごろつきＡ
ライフ　５
リザーブ　０
トラッシュ　２
フィールド
ディノニクソー　ＬＥＶＥＬ１
ダークゴラドン　ＬＥＶＥＬ１
手札　３
「明けの明星のターン！天使グレットを召喚。ターンエンド」
エリス
ライフ　５
リザーブ　０
トラッシュ　３
フィールド
天使グレット　ＬＥＶＥＬ１

手札　４枚
「今度はおいらのターンだぜ！ディノハウンドを召喚。さらにダークディノハウンドを召喚。ターンエンド！」
ごろつきＢ
ライフ　５
リザーブ　０
トラッシュ　２
フィールド
ディノニクソー　ＬＥＶＥＬ１
ダークゴラドン　ＬＥＶＥＬ１
ディノハウンド　ＬＥＶＥＬ１
ダークディノハウンド　ＬＥＶＥＬ１
手札　３
「やっと、俺のターンか」
まったく長かった。
「電人ドレインを召喚。召喚時効果発揮」
究極巨神アルティメットトール
オートマチックガンナー
シャットアウト
リロードコア
「オープンした中にアルティメットがあればその中のアルティメット１枚を手札に」
手札４→５
「アタックステップ！グレットでアタック。アタック時効果」
グレットは弓矢でダークディノハウンドを打ち抜いた。
「ダークディノハウンドのＢＰを－３０００。０になったので破壊！」
刺さった矢はダークディノハウンドから命を吸い取って行きダークディノハウンドは命が枯れはて灰になってしまった。
「ライフで受ける！」
ごろつきＢ

ライフ5→4
「俺はこれでターンエンド」
ソロア
ライフ　5
リザーブ　0
トラッシュ　3
フィールド
電人トレイン　ＬＥＶＥＬ１
手札　5
「俺様のターン！暴竜ティラノ・バッキーを召喚！」
ごろつきＡがフィールドにカードを置くと地面が盛り上がった。
そしてそこから赤い骨の恐竜が現れた。
「さらにプリズムモルフォを召喚！」
今度は6色に色が変わる蝶が現れた。
「アタックステップ！ティラノでアタック！」
骨の恐竜はこちらめがけて2つの火球を放った。
「アタック時効果によりＢＰ３０００以下のスピリットを2体を破壊するぜ！」
火球はそのままトレインとグレットにあたり2体は破壊されてしまった。
「ライフで受ける」
ソロア
ライフ　5→4
「ダークゴラドンで追撃！」
「ライフで受ける」
ソロア
ライフ　4→3
「さらにディノハウンド！相手ライフをもぎ取れ！」
「フラッシュタイミング！ミストバラッジ。ダークディノハウンドを指定」
深い霧がダークディノハウンドを蔽う。

「これでそのスピリットでは俺のライフは削れない。そしてライフで受ける」
ソロア
ライフ　３→２
「くっ！削り切れないか。ならターンエンド」
ごろつきＡ
ライフ　５
リザーブ　０
トラッシュ　１
フィールド
ダークゴラドン　ＬＥＶＥＬ１
ディノニクソー　ＬＥＶＥＬ１
ディノハウンド　ＬＥＶＥＬ１
ダークディノハウンド　ＬＥＶＥＬ１
暴竜ティラノ・バッキー　ＬＥＶＥＬ１
手札　３
「暁の星のターン！天使イヴェールをＬＥＶＥＬ２で召喚」
今度の天使は厚着で銃を持った女の子のようだ。
「バーストセット！アタックステップ！天使イベールでアタック！」
イベールは持っている銃をティラノ・バッキーに向けトリガーを引いた。
そして銃口から出た弾丸はティラノ・バッキーを打ち抜いた。
「ティラノバッキーのＢＰを—３０００。
この効果で相手スピリットのＢＰを０にしたときデッキから１枚ドロー！」
エリス
手札　４→５
「それぐらいのアタック、ライフで受けてやるぜ！」
ごろつきＡ
ライフ　５→４
「私はこれでターンエンド」

エリス
ライフ　５
リザーブ　０
トラッシュ　２
フィールド
天使イヴェール　ＬＥＶＥＬ１
手札　５
「今度はおいらのターンだ！キングゴラドンを召喚！アタックステップ！ディノハウンドでアタック！」
「ライフで受ける！」
エリス
ライフ　５→４
「バースト発動！バーストスナップ！」
エリスがバーストを発動すると光の輪が
ゴラドンとダークディノハウンドとディノニクソーとキングゴラドンを捕縛した。
「これでコスト０、１，３，５，７，９，１１のスピリットはアタックできない！」
「ターンエンド」
ごろつきＢ
ライフ　４
リザーブ　０
トラッシュ　０
フィールド
ディノニクソー　ＬＥＶＥＬ１
ゴラドン　ＬＥＶＥＬ１
ディノハウンド　ＬＥＶＥＬ１
ダークディノハウンド　ＬＥＶＥＬ１
暴竜ティラノ・バッキー　ＬＥＶＥＬ１
キングゴラドン　ＬＥＶＥＬ１
手札　３

「氷魔のターン！オートマチックガンナーを２体召喚！バーストセット」
　黒い起動兵器が２体フィールドに降り立った。
「２体のスピリットソウルを発揮！起動せよ！白き巨神よ！アルティメットトール召喚」
　フィールドは真二つに割れそこからトールが現れた。
「トール！敵陣を打ち破れ！Ｕトリガーロックオン！」
　トールが大槌を振り下ろすと相手のデッキの一番上のカードがめくれ上がった。
「コストを応えな！」
「コスト６竜王ジークフリード」
「ヒット！これでスピリットからはブロックされない！」
「ライフで受ける！」
　ごろつきＢ
　ライフ４→３
「これでターンエンド！お前らはこれで終わりだ」
「どういうことだ！」
「それを身をもって体験しな」
　ソロア
　ライフ　２
　リザーブ　０
　トラッシュ　３
　フィールド
　究極巨神アルティメットトール　ＬＥＶＥＬ４
　オートマチックガンナー　ＬＥＶＥＬ２
　オートマチックガンナー　ＬＥＶＥＬ１
　手札　３
「生意気言いやがって叩き潰してやる！ブレイドラを召喚！ブレイドラいけ！」
「かかった！」
　今まで膝をついていたトールはブレイドラが突撃してきた瞬間立

ち上がった。
「トールの効果でＬＥＶＥＬ２以下のスピリットがアタックしたとき回復する」
「なに！」
「ブロックだ！トール！」
　究極巨神アルティメットトール　ＢＰ１５０００
　　ＶＳ
　　ブレイドラ　ＢＰ１０００
　トールめがけて特攻していったブレイドラはトールの大槌で叩き潰された。
「もしや、お前！噂のアルティメット使いレイなのか!?」
「違うがその話、詳しく聞かせてもらいたいな」
　ごろつきＡ
　ライフ　４
　リザーブ　０
　トラッシュ　０
　フィールド
　ディノニクソー　ＬＥＶＥＬ１
　ダークゴラドン　ＬＥＶＥＬ１
　ディノハウンド　ＬＥＶＥＬ１
　ダークディノハウンド　ＬＥＶＥＬ１
　暴竜ティラノ・バッキー　ＬＥＶＥＬ１
　キングゴラドン　ＬＥＶＥＬ１
　手札　３
「暁の星のターン！天使グレットを召喚！」
　グレットは弓を構えティラノ・バッキーに矢を放った。
「召喚時効果により、ティラノ・バッキーのＢＰを－３０００」
　ティラノ・バッキーめがけて放たれた矢は、頭部に突き刺さり敵の命を奪い去った。
「この効果でＢＰが０になった場合、破壊する」
「さらに、アタックステップ！天使イヴェールでアタック！」

イヴェールが放った弾丸はダークゴラドンを打ち抜いた。
「アタック時効果によりダークゴラドンのＢＰを—３０００する。さらに０になった場合デッキから１枚ドロー！」
エリス
手札　４→５
「ダークゴラドン、ブロックだ！」
天使イヴェール　ＢＰ４０００
ＶＳ
ダークゴラドン　ＢＰ０
イヴェールは再び銃を構えダークゴラドンの命を弾丸で奪った。
「これで私はターンエンド」
エリス
ライフ　４
リザーブ　０
トラッシュ　２
フィールド
天使グレット　ＬＥＶＥＬ１
天使イヴェール　ＬＥＶＥＬ３
手札　５
「兄貴のスピリットを破壊しても、守りが手薄なら、どうとでもなるぜ！おいらのターン！」
どうやらわかってないようだ、エリスはとっておきの隠し玉を持っている。
何となくだがわかる、トールを手に入れてから相手がアルティメットに選ばれているか、
どうかが分かるようになってきた。
ミロクの時をそうだったがエリスもアルティメットを持っている。
「おいらはブレイヴオーラを使用するぜこれでおいらのスピリットすべてはＢＰ＋１０００だ！」
ブレイヴオーラの力でスピリットたちの闘争本能が刺激され、皆それぞれ構え始めた。

「アタックステップ！ディノハウンドでアタック！」
「ライフで受ける！」
エリス
ライフ　4→3
「さらにダークディノハウンドでアタック！」
「フラッシュタイミング！シンフォニックバースト！」
音符の壁がほかのスピリットの追撃を許さないかのごとく出現した。
「バトル終了時、私のライフが2以下なら、アタックステップを終了させる。
そしてそのアタックはライフでもらおう」
エリス
ライフ　3→2
「くそ！次こそ仕留めてやる！」
ごろつきB
ライフ　3
リザーブ　0
トラッシュ　2
フィールド
ディノニクソー　ＬＥＶＥＬ１
ディノハウンド　ＬＥＶＥＬ１
ダークディノハウンド　ＬＥＶＥＬ１
キングゴラドン　ＬＥＶＥＬ１
手札　1
「次があればいいがな。氷魔のターン！起動せよキングフォートレス！」
フィールドのはるか向こうから1機の飛行船がやってきた。
「召喚時効果、俺の場の武装1体につき、お前のスピリットを1体を手札へ」
キングフォートレスが体を変形させると、
体に着いた無数の銃口から放たれたエネルギー弾が4体のスピ

リットを手札へと戻した。
「さらにこの効果で戻したスピリット一体につきボイドからリザーブにコアを1つ置く」
リザーブ　0→4
「それぞれにコアを振り分け。
アタックステップ！トールでアタック、アルティメットトリガーロックオン！コストをいいな」
「コスト0、リザドエッジ」
「ヒット、砕け敵のライフを」
ごろつきB
ライフ　3→2
「さらにオートマチックガンナー2体で追撃！」
「クソ――！」
ごろつきB
ライフ2→1→0
「これで残りはお前だけだ」
「だが、俺のライフはまだ4もあるんだ簡単に俺は負けねー！」
「まぁ、そう思うと言いと、思うぜ。なにせまだ俺はお前を仕留められないからな。キングフォートレスやれ」
「ライフ！」
ごろつきA
ライフ　4→3
「これで俺はターンエンド」
ソロア
ライフ　2
リザーブ　0
トラッシュ　3
フィールド
究極巨神アルティメットトール　ＬＥＶＥＬ５
オートマチックガンナー　ＬＥＶＥＬ２
オートマチックガンナー　ＬＥＶＥＬ２

空の要塞王キングフォートレス　ＬＥＶＥＬ３
手札　３
「俺のターン！ここは防御を固めて機会を狙うしか」
はっきり言うと俺たちのライフを削り切るなんて無理な話である。
ＬＥＶＥＬ３にするのに、最低３つコアが必要なうえに俺たちのライフ、合計４つを削らなくてはならない。
「ここはネオハンドリバースを使用！手札をすべて破棄して３枚ドロー！」
これは予想外だった。
「おれはバーストをセットしターンエンド！」
ごろつきＡ
リザーブ　２
トラッシュ　５
手札　２
「暁の星のターン！何がしたいのかは知らないが容赦はせん！天使ウィズエルを召喚」
天使というには魔女ぽいかっこをした天使が現れた。
「フィールドに咲く聖騎士！アルティメットヴァリエル、戦い始めの時間だ！」
俺が予想していたものよりもすごいものが出てきた。
その姿は神々しく騎士のような強さが見て取れた。
「アルティメットヴァリエル！アタックアルティメットトリガーロックオン！」
「コスト３キングゴラドン！」
「ヒット！これでヴァリエルよりＬＥＶＥＬの低いスピリットからブロックされない！」
「ライフで受ける！」
ごろつきＡ
ライフ　３→２
「さらに天使グレットでアタック！」
「それもライフ！」

ライフ　2→1
「さらに天使グレットでアタック！」
「ライフで受ける！」
ライフ　1→0
「なんだったんだ、あのバースト？」
不思議に思いながらも勝負は俺たちの勝ちで終わった。

UKNOWN　EGG

「とりあえず、お前ら二度とこの店にちょっかい懸けないこと
　それと俺、服買いたいからお金出せ」
「うそーん！」
「ウソじゃない」
「せめて、お金だけは」
「なら、ほかに何が出せるんだ」
「これならどうでしょう」
　ごろつきAは小さなカプセルを出してきた。
「これが、代わりになるとは思えないのだが？」
「これはギルドの連中からくすねたものでしてスイッチを押すと中身が出てくる仕組みです」
「で、中身は？」
「大きな卵です」
「強いカードバトラーが持っていると孵化してとても心強いパートナーになってくれるとか」
「それは、おもしろそうだな。よし服は勘弁してやる」
「ありがとうございます!!」
「とりあえず、もう用はないからどこに消えても構わないぞ」
「わかりました!!」
　ごろつきたちはそそくさと逃げていった。
「俺はこれから船と服を探さなきゃならないんだが、どうする？」
「私は船の修理に来ただけだからな。そうだ、私が案内でもしてやろうか？」
「それは心強い。じゃ、たのむは」
「お待ちください。船なら私がお礼に安く売りますよ！」
「安く売ってくれるのは、ありがたいが船はどこにあるんだ？」
「店の奥にあります。本当はまずカタログを見せてから売るのですが今回は特別です。
　まじかで見て乗って選んでもらっても構いません」

「ソロア！これはお得だぞ！」
「そうなのか。なら見てみるか」
「では、こちらに」
　俺とエリスは店の人に連れられ、店の奥まで行った。
　店の奥には、見たことも無いような船が数々並んでいた。
「スゲー！」
「これは素晴らしいな！」
　俺たちはこの光景を見た瞬間、感嘆の声を上げてしまった。
「これって、いくらぐらいするんだ？」
「そうですね。だいたい１０００００００Ｇです」
「エリス、俺、あんまりお金の事分からんから教えてくれ」
「だいたい、１００立方メートルぐらいのカードクリスタルと同等だ」
「あんまり価値がわかないけど、すごく高いってことでいいんだよな」
「あぁ、そうだ」
「店員さん、どこまで安くしてくれるの？」
　俺は恐る恐る聞いてみた。
「そうですね。お願いを聞いてくれるのであれば、あなたがここまで来た船と交換でどうでしょう？」
「べつにかまわないけど。何すればいいんだ」
「ギルドから娘を助けてほしいんです！」
「別にいいけど、その娘さんどこにいるの？」
「２階の自宅にいます！」
「うん、で？ギルドから助けてほしいというのは？」
「ちょうど今から２４時間後にギルドが関税を取りに来るんです」
「それは、払えないあんたが悪いのでは？」
「それがとてつもない、ほどの関税をかけてくるんです」
「ちなみにいくらなんだ？」
「売り上げの１５０％です」
「よし、引き受けた。それは理不尽な値段だ」
　どう考えてもおかしい、売り上げの１５０％？
　絶対に儲からないじゃないか。

「ありがとうございます」
「よしエリス！今度は服屋に案内してくれ」
「いいが。あんなに簡単に受けてもよかったのか？」
「これでも、俺はギルドのカードバトラーを3人も倒しているんだぜ」
「あまり自信過剰は良くないと思うぞ」
「そこら辺は理解してる。だけどこれぐらいで怖気づいてしまうようじゃ、
　これから生まれてくるこいつに笑われちまう」
　そんなこんなで話していると服屋にたどり着いた。
「ここか。よさそうな服、置いてんじゃん」
　俺はそのまま店の奥に入り、服を物色し始めた。
「エリス、この服にあってるか？」
「いいや、こっちの服のほうが似合ってると思うぞ」
　こんなやり取りをしているといつの間にか日が暮れかけていた。
「日が暮れてきたな」
「あぁ、そうだな」
「よし、ならエリスに選んでもらったこの服、買うことにするは」
　俺はエリスに選んでもらった、赤いラインの入ったコートをレジまで持っていき買ってきた。
「そういえば、ソロアは止まる宿があるのか？」
「宿って程のものじゃないが船ならあるぞ」
「そうか、ソロアさへ良ければ私の船で泊まらないか？」
「いいのか？」
「問題ない。部屋は客室間を使ってもらえればいいだけだからな」
「ならお言葉に甘えて、泊まらせてもらおうかな」
　こうして1晩だけ宇宙海賊の客人になるのであった。

「お頭！どういうことですか！こいつ男ですよ？」
「そう、わめかないでくれ。俺、うるさいの苦手だから」
「そうだぞ。たった1晩だ。それに私が連れ来た男だ」
「そうだべ。むしろ親方がやっと男を連れ来たことに、喜ぶべきだと

思うべ」
「・・べ・・べつにソロアはそういう関係ではない！」
エリスは頬を赤く染めながら否定した。
（可愛いな）
「そうだな。俺が気に食わないのならバトルで追い出してみたらどうだ？」
俺が勝負を持ちかけるとポニーテールの少女は口元を緩めた。
「私に勝てるとでも？」
「むしろ、俺に勝てるとでも？」
「いいでしょう。その顔を悔しさでゆがめて差し上げてあげますわ！」
第5ターン
「ケイローン！とどめの一撃を決めろ！」
「そんな馬鹿な！」
ガルボ
ライフ　1→0
「追い出すって、決めた割には大したことないな」
「悔しいですわ」
俺はバトルフィールドから出ると、相手をあおるように声をかけた。
「そこまで攻めないでやってくれ。ソロア、お前が少しばかり強すぎただけだ」
「そこまで言うなら、やめとくは。だけど次、戦うときは、もう少しぐらい強くなっていてくれよ」
「クッ！」
「そうじゃないと、お前たちの親方が倒れた時、誰がこの船を守るんだ？」
「それは・・・」
「エリス、客室に案内してくれ」
「あぁ、わかった」
そして、俺は客室にたどり着くとエリスにガルボのことを伝えた。

「エリス、あいつは、、もう少しだけ強くなることができる。だから、その伸びしろ、伸ばしてやれよ」
俺はそう言って部屋の中に入って行った。

銀河七将とのバトル

その晩は、暁の星の船の客室で過ごした。
まぁ、過ごしたといっても寝てただけだが。
「よく寝た」
そのまま、起きて身支度を整えていると部屋の扉がノックされた。
「入って、良いぞ」
入ってきたのは、エリスだった。
「よく眠れたか？」
「あぁ、よく眠れた。まだ、目的の時間まで余裕があるが、どうして暇をつぶそうか迷っているんだがだが？」
「なら、次に行きたい場所でも決めておけばどうだ？」
「そうか、なら考えておく。一番星っていうカードバトラーにもあってみたいしな」
ギルドが来るまでに暇つぶしとして次に行く星でも考えよう。
「ジャグーチでもいいが、アイスキューブも捨てがたい、かといってグリーンスムージでもいいしな」
ちなみに今いる船の星は第2階層、それなら第2階層を回ればいいと思うかもしれないが。
「もし、このまま第二階層回ったら、そのまま第3階層に言っちまいそうな気がするんだよな」
よし、くじで決めよう。
だが問題は、だれに引いてもらうかだ。
「人に作らせるという選択肢はなしだ」
エリスに引かせるのはなんだか悪いし、かといってガルボが引くわけないし、ほかの奴に引いてもらうにしても面識がない。
「そうだ、こっちに来るギルドの奴に引かせよう！」
そうと決まれば、速製作。
服のポケットから昨日買った服のレシートを取り出しシャーペンであみだくじを作っていく。
案外、作ってみるとそこまで時間がかからなかったのでさらにデッ

キ構築も考えてみる。
「赤と緑は豊富だが、白があまりないな。これじゃデッキ構築を考えれない」
赤と緑は常に使っていたカードなのでたくさんあるが、白は予備が5枚と少ない。
「いっその事、少しだけ赤のカードを入れるのをいいかもしれないな」
バーストならタダ打ちできる可能性があるし。
そんなことを思いついてしまったのでデッキ改造をまた始める。
そして、そんなこんだしているうちに時間が来てしまった。
「やべ、早くしないと」
デッキをまとめ、荷物もまとめて目的地まで走って行った。

急いで目的地の家までたどり着くとギルドのマークが入った船が一隻あった。
「今回は、特別にゴリ押しのゴーイン様が徴収にきてやったぜ」
シルクハットをかぶった中年のおっさんが恥ずかしげもなく自分の名前を叫ぶ。
「さぁ、金を出してもらおうか」
「その必要はないぜ、おっさん」
俺はシルクハットのおっさんにデッキ向け叫んだ。
「ターゲット!」
「これは予想外だ。まだ、はむかう輩がいるとは」
「実はな、お前を二度とこの星に来れないようにしたら、スゲー船くれる言ってんだよ」
「なら、残念だったな。銀河七将のゴリ押しのゴーインにケンカ売ったこと後悔さしてやるぜ」
「「ゲートオープン!解放!」」
二人の掛け声とともに俺たち二人はバトルフィールドへと飛び出した。
今回、俺が使うデッキは赤と緑の混合デッキだ。
「俺が先行をもらうぜ!」

メインまでのステップを終了させ俺は手札を見た。
(はじめは、ホムライタチでスタートして双翼乱舞をセットしてターンエンドってところか)
「俺はホムライタチを召喚!さらにバーストをセットしターンエンド」
ソロア
ライフ　5
リザーブ　0
トラッシュ　2
フィールド
ホムライタチ　ＬＥＶＥＬ１
手札　3
「ゴリ押しのターン!旅団の摩天楼を配置!配置時効果によりデッキから1枚ドロー」
あたりが暗くなると同時にまがまがしく光る塔が出現した。
「さらにアメジスバットを召喚。ターンエンド」
ゴリ押しのゴーイン
ライフ　5
リザーブ　0
トラッシュ　4
フィールド
アメジスバット　ＬＥＶＥＬ１
手札　4
「俺のターン!俺はセッコーキジを召喚し、さらに賢龍ケイローンを召喚。
召喚時効果によりアメジスバットを破壊し1枚ドロー」
半龍半馬の怪物が俺のフィールドに降り立つと、アメジスバットめがけて矢を放った。
その矢は逃げ惑うアメジスバットを正確に打ち抜いた。
「さらにラッシュにより、緑シンボルが一つあるとき1コアブースト。
さらに二つあれば、さらに1コアブースト!さらにルリ・オーサを

召喚」
お次は、身の丈と同じぐらいの剣を持ったオオルリオサムシが現れた。
「召喚時効果により、赤のスピリット2体に1つずつコアブースト！これでターンエンドだ」
ソロア
ライフ　5
リザーブ　0
トラッシュ　3
フィールド
ホムライタチ　ＬＥＶＥＬ１
セッコーキジ　ＬＥＶＥＬ２
賢龍ケイローン　ＬＥＶＥＬ１
六分儀剣ルリ・オーサ　ＬＥＶＥＬ２
手札　2
「なんだ、そのコンボ！中型スピリットがこんなにも早く、2体も？」
「驚く暇があったら、どうやって乗り越えるかも考えるべきじゃないか？」
「いわれなくとも。ゴリ押しのターン！ダークソードルを召喚！」
相手の場に、白と紫ではなく黒一色のソードールが現れた。
「召喚時効果によりデッキから1枚ドロー！」
「なら召喚時効果発揮後、バースト！双翼乱舞！デッキから2枚ドローさらにメイン効果を発揮！」
俺のデッキに二つの竜巻が出現するとその竜巻は俺のデッキの上から4枚手札に持ってきた。
「さらに2枚ドローするぜ」
ゴリ押しのゴーイン
手札　4→5
ソロア
手札　2→6
「一気に俺の手札を超えやがった！」

「俺の手札は6枚、スピリットは4体、ライフは5、どこをとってもお前が勝ってる部分がないな」
「うるせー！俺は摩天楼のＬＥＶＥＬを2にＵＰさせ、ダークソードールでアタック！」
　ダークソードールがこちらにむかって走り出すとそれに合わせて摩天楼が光り始めた。
「摩天楼の効果により、ケイローンのコアを1つリザーブに！これでケイローンは消滅だ！」
「ライフで受ける！」
　ソロア
　ライフ　5→4
「これで俺はターンエンドだ！」
　ゴリ押しのゴーイン
　ライフ　5
　リザーブ　0
　トラッシュ　2
　フィールド
　ダークソードール　ＬＥＶＥＬ1
　旅団の摩天楼　ＬＥＶＥＬ2
　手札　5
「俺のターン。賢龍ケイローンを再び召喚。効果は説明しなくてもいいよな？」
　ケイローンは弓の弦を引き絞り、ダークソードールめがけて矢を放った。
　ソロア
　手札　5→6
「さらに俺の分身、射手星鎧ブレイヴサジタリアスを召喚！」
　空に射手座が描かれたと思うと紅い鎧がフィールドめがけて走ってきた。
「さらに牡羊星鎧アリエスブレイヴを召喚！」
　今度は牡羊座が空に描かれ、そこから黄緑の体に金色の角が生えた

鎧が降り立った。
「二つのブレイブを賢龍ケイローンにダブルブレイヴ！」
　二つの鎧はケイローンの周りを飛び回りケイローンの体に装備されていく。
「ダブルブレイヴだと!?」
「さらにガイミムスを召喚し、ルリ・オーサにブレイヴ」
　ルリ・オーサはガイムミスの背中に乗り手綱を握る。
「アタックステップ！ルリ・オーサでアタック。ブレイヴアタック時効果により相手のネクサスを一つ破壊！」
「ライフで受ける！」
　ゴリ押しのゴーイン
　ライフ　5→3
「これでとどめだ！ケイローンでアタック！」
「ライフで受ける！」
　ゴリ押しのゴーイン
　ライフ　3→0
「これぞ、射手座の本気。何人たりともこの矢から逃れれるものはなし！」
　フィールドから出ると俺はゴーインに言った。
「ギルドに伝えておけよ。射手座には向かうのなら、本気で来いってな。
　それとついでにこれやってくれないか？」
　そう言って俺はゴーインの前にあみだくじを出した。
「お前がこれをやってくれたら、俺は次にむかう場所が決まるし、お前は俺が次どこに行くかが分かって、一石二鳥だろ」
「わかった。これで負けたといううう汚名が薄まるだろう」
　ゴーインがあみだくじをするとたどり着いたのは。
「グリーンスムージか」
「ソロア、次はグリーンスムージに行くのか？」
「そのつもりだが？」
「なら一緒に行こう！私たちの次の行先もグリーンスムージーなの

だ」
「べつにいいぜ」
そう言うことで次の行先が決定した。
次の行先はグリーンスムージ。
暗黒神ボンバーなんて神様がいるらしいが、どうせただのうわさだろう。
それにギルドの奴、追い返したから船も手に入るし。
「結構、いいことばかりだな」
そんなことをつぶやきながら俺はゴリ押しのゴーインを追い帰した。

宇宙船入手

「ありがとう、追い返してくれて。
　まさか銀河七将を追い帰すなんて、あなたすごいバトラーなんだね」
「いや、ここではまだ駆け出しバトラーと大差ないですよ」
「そうなのか、なら名前を借りて守るというのもできないのか」
「そんなことでいいなら名前ぐらいお貸ししますよ。
　俺の目的は当分人生を謳歌することですから、バトルだってものすごくやるだろうし。
　そうだ旗とか作ってもらえたりするなら大丈夫だと思いますよ」
「そうなのか、なら船と一緒で交換でいいよ。だけどこれから名前を轟かせてくれよ」
「わかりました」
　銀河七将かあと6人いるのか面白そうだ。
「おじさん、旗作るのにどれぐらい時間がかかるですか？」
「そうだなイラストしだいだが1日ぐらいで作れるだろう」
「そうかエリス。俺も追ってグリーンボール行くから先行っといてもらっていいか」
「わかった、だが早く来てくれよ。
　私の水着姿を生で見る初めての男は強い男がいいからな」
「そりゃ、ほかの男に見られないように早くたどり着かなくちゃな」
「親方が男を口説いてるべ」
　いつの間にかマレーネがエリスの横に立っていた。
「マレーネ、いつの間に！」
　エリスは驚きのあまり腰を抜かしていた。
　俺もあと数秒きずかなければエリスと同じく腰を抜かしていたであろう。
「親方がソロア殿に『早く来てくれよ』ってところからいたべ」
「なぁ！」
　エリスは顔を真っ赤にしている。

「これはみんなに報せるべきだべ」
そういってマレーネはエリスの船にむかって走って行った。
「こらまて、マレーネ！」
エリスもマレーネを追いかけて船にいった。
「それじゃ、紙とペンをくれないか。イラストは口頭より見せたほうがはやいだろ」
「そうですね。そういえば船はどれにするかもう決めているのですか？」
「そうだな、だいたい決まってる」
「それじゃ、船置き場に行きましょう。そこでもイラストは書けるでしょう」
「そうだな」
おじさんの案内で船置き場にたどり着く。
「どれなんだい？」
「これでいいですよ」
俺が選んだのはエリスの船と同じぐらいのサイズの船だった。
「もっと、大きいのでもいいんですよ？」
「いいや、どうせ俺ぐらいしか乗らないんだから、これぐらいでも大きいほうですよ」
「そうかい。それと紙とペンここに置いておくよ」
「ありがとうございます」
おれは机に置かれた紙にペンで弓矢のイラストを描いた。
「これ、頼みます。
それと船は船着き場に丸い顔みたいな船があるんで、
見たらすぐわかるレベルなんで案内しなくても大丈夫ですよね？」
「あぁ、大丈夫だよ。
なにせギルドの船なんだろあれ？」
「なんで知ってるんですか？」
「いや、実は最初から目をつけていた船だったんでね。
あれがあれば少しはギルドの関税から逃れられるのではと思っていたんだが」

「そうなんですか」
「実は君が負けても、あの船買い取らせてもらおうかなと考えていたんだよ」
「まぁ、勝ったから俺は得できたんですかね？」
「特はできたと思うよ。それじゃ、この旗作るからどこかで油でも売ってきなよ」
「そうですね」
　さてどこに行こうか。
　そういえば卵のこと確認してなかったな。
　おれは外に出るとカプセルのスイッチを押し、卵をカプセルの中から出した。
　中から出した卵は前に触った時以上に暖かくなっていた。
「バトルをすればするほど卵が温まってくるということか？」
　カプセルに卵を直し、酒屋に行く。
「たのもー！ここにいるバトラー、一人残さず倒すから並べ」
「なんだと貴様！」
　これからは勝ち逃げリレーの開始である。
「大天使ヴィエルジュで最後のライフを砕く！」
「バカな！」
　モブＡ
　ライフ１→０
　これで１勝。
「サジットアポロでシャイニングドラゴンにしてアタック！」
「このままじゃ」
　光輝龍神サジットアポロドラゴン
　ＢＰ　１８０００
　　ＶＳ
　輝龍シャイニングドラゴン
　ＢＰ　１６０００
「シャイニングドラゴン撃破！」
　シャイニングソードを振るうシャイニングドラゴンを上空から

シャインブレイザーで、
プレイヤーごとサジットが射抜く。
「ＢＰ　８０００以上を破壊したことによりライフを１つ破壊」
モブＢ
ライフ１→０
これで２勝目。
「トールで最後のライフを破壊！」
モブＣ
ライフ　１→０
これで３勝目。
「ドルクスウシワカでライフを砕く」
モブＤ
ライフ　１→０
これで４勝目。
「俺が最後の相手だ！」
ターン１０
「ジャッジメントドラゴニスでとどめ」
「グベラバァ！」
モブＥ
ライフ　１→０
これで５勝、酒場のカードバトラー全撃破。
「こずかい稼ぎは完了」
５０００Ｇも集まった。
酒場を出るともう夕暮れだった。
「もう夕暮れか、旗の完成度でも確認しに行こうかな」
いまごろエリスたちは階層移動ゲートにむかっているのだろう。
俺も早くいかなくては暗黒神なんて怪しげなうわさがあることだし。
「おっ、ソロア殿、旗作り終えましたよ！」
あれ、１日かかるとか言ってなかったけ？
「おじさん、旗作るのに１日かかるって言ってなかったけ？」

「実は全自動ハタ織機が見つかりましてそれを使うと効率よく進んだものですから」
「そうなんだ」
「それと船、港に出しておきました」
「旗は？」
「船につけました」
「うん、ありがと」
　俺はそれだけ言って港にむかった。
　その後、船に乗りデッキケースを1つ船のエンジンにし全速力でグリーンスムージにむかった。
「目指すはグリーンスムージ、そしてエリスの水着姿を拝むこと！」

グリーンスムージ到着！ゴリラ狩り

船に乗った俺は船の操作をオート操縦に切り替えグリーンスムージーにむかっていた。
そして、ぜっさんデッキ改良中である。
「俺の赤緑のデッキをどう改良するかだな」
俺の象徴たるブレイヴサジタリアスは絶対に抜けない。
俺に自分の分身を預けてくれたアリスのアリエスブレイヴも抜けない。
問題はここからだ。
星将を軸にするか、光導を軸にするか悩ましいところだ。
そういえば俺とネイクスはあそこから飛び出してきたがほかの13宮は元気にしているだろうか？
「裏切られたってのにあいつを入れて13宮って呼んじまうぜ」
他の13宮はみんな口をそろえて俺のことをお人よしって呼ぶだろう。
「こんなんだから裏切られたのかもな」
「わが主よ、少し話がある」
デッキからトールが飛び出してきた。
「なんだ？」
「主は他のアルティメットに興味はあるか？」
「はっきり言うとどっちでもいいんだよな」
「そうか。
だが興味があるというならば数に限りがあるということを覚えておいてほしい」
「なぜに？」
「普通はアルティメットのような強力なカードは複数枚は持てない」
「そうなんだ」
「だが世の中にも例外がある」
「例外？」
「そうだ例外だ。

体に究極シンボルを持つ者はアルティメットを複数枚持っても大丈夫なのだ」
「つまり俺にはそれがないと？」
「そういうことだ。だが主も例外の一人だ。ぎりぎり3枚までならいけよう」
「そうなのか。で、なぜに今それを？」
「グリーンスムージーにアルティメットの反応が6つ、そのうちフリーが2つだ」
（1つはエリスのものとして、残り三つは誰のだ？）
そもそも同じ星に6枚も集まってる時点でおかしい。
あんな強力なカードが6枚も。
「わかったきおつけるようにするよ」
俺がそう返事するとトールはおとなしくカードケースの中に帰って行った。
「もしそのアルティメットの主がレイかキリガならお得なんだがな」
まぁ、そんなことはありえないだろう。
ふと思ったことを自分で蹴り飛ばしデッキの構築に戻った。
それからいく分かたったであろう、船が目的地への到着を伝える。
『間もなく、グリーンボールに到着します。
衝撃に備え、シートベルトを締めるか近くの手摺りにおつかまりください」
俺は即座に組みなおしたデッキをケースに戻し椅子に座りシートベルトを締めた。
すると少し浮くような感覚のあとに船は着陸した。
俺はすぐに席から降り船の外に出た。
降りたその先はジャングルが広がる緑の星だった。
そして突如として猿いなゴリラが襲い掛かってくるぐらいに治安が悪かった。
「「ウホォー！」」
「邪魔だ！」
そしてそのゴリラを2匹アイアンクローで掴み残る1匹のゴリラ

に叩き付ける。
３匹とも1撃でしずみ倒れる。
「鬱陶しいゴリラどもだぜ」
このゴリラを放置するわけにもいかず地面をけり上げ大きな穴を作る。
そこにゴリラを顔だけ出す形で埋める。
「トール、エリスの下に案内してくれ」
トールの入ったデッキはまっすぐ白色の光を出す。
それに従い道を進む。
するとそこにあったのは巨大なキノコと蔓につかまった少年少女が1人ずつ、それとロボットが1機。
「そこの人、助けてくださーい」
「おう、ちょっと待ってろ」
俺は弓矢を取り出し蔓を打ち抜き下のウツボカズラの口を矢で縫いとめる。
そのまま落ちてきた少年少女たちは弾力性の高いウツボカズラに弾かれ軽傷ですんだ。
「いてててて、ありがとうございます助けていただいて」
「ありがとうございます」
「お礼にピザはどうでしょう？」
「いや、ピザはいらないよ。それよりこれから上に行こうと思うんだが来るか？」
「どうしよ。レイが戦ってるし」
「俺ならもう終わったぜ」
振り返ると少年と少女が1人ずついた。
その時、俺の直感がキノコで上でなにか聞き捨てならない言葉を聞いた気がした。
「すまんな状況が変わった一人で行かしてもらう」
俺は蔓を使い一気に上に上がった。
キノコの頂上にたどり着くとバトルフィールドに転送された。
飛ばされた観客席にはガルボとマレーネがいた。

そしてバトルフィールドにはエリスとゴリラがいた。
「びっくりしたべ」
「本当ですはいきなり現れるだなんて」
「いや悪い悪い。それよりもなんでゴリラとエリスが戦ってるわけ？」
「実はだべな。これがこうであれがこうで」
「ふむ、つまりあのゴリラは俺の敵だと」
許しがたいな。
ゴリラの分際で俺の恋路を邪魔しようとは迷惑極まりない。
「だがこの勝負、確実にエリスの勝ちだな」
エリスの場にはアルティメットヴァリエルと天使アエスタが2体。
さらに手札が2枚その内1枚にサンダーウォール、もう1枚がフェアヴァイレ。
この手札なら確実だろうそれにヴァリエルのUトリガーがクリティカルヒットすれば、
トラッシュのマジックが1色丸々帰ってくる。
「アルティメットヴァリエル、Uトリガーロックオン！」
ゴリラのデッキの上がめくられる。
「コールせよ」
「コスト3」
「ヒット！」
さっき助けた少女がヒットという。
確かにヒットだがこれが只のヒットじゃすまないのである。
「ただのヒットではない、クリティカルヒットだ」
「ならカーンウルフでがぶっと・・・ブロックできない!?」
「そう、わがヴァリエルよりＬＥＶＥＬの低いカーンウルフはブロックできない」
ゴリラは驚きの声を上げる。
まぁ、こんなもんじゃ終わらないのだが。
それよりもあのゴリラさっきから肩の鳥にしゃべらせているが自分は喋れないのだろうか？

「まだ何かあるの？」
ゴリラのトラッシュのタフネスリカバリーが光りだす。
「そうだ。
ヒットしたカードがマジックカードならクリティカルヒットとなり、
わがトラッシュののマジック1色すべて手札に戻す！」
「ライフで受ける！」
暗黒神ボンバー
ライフ　3→2
「守りの最後の砦、カーンウルフは健在！このターンのりきりましたよ」
「踊るのだアエスタ！」
「フルアタックしても最後のライフは削れません！」
「忘れたのか？わが手札に戻ったマジックカードを。フラッシュタイミング、エンジェルストライク！」
カーンウルフは光の波にぶつかる。
「ＢＰダウン！」
カーンウルフ　ＢＰ７０００→２０００
「さらにもう1枚。狼よ、ねぐらにに帰ってもらうぞ」
光る波がもう一度カーンウルフに直撃する。
そしてカーンウルフのＢＰは０になり破壊される。
「あんたこのターン、容赦なさすぎ」
「戦いとは美しく激しく時に大胆にそれが宇宙で生きる私のルール」
「お頭の恋もそうだろうべな」
「それを言わないでくれマレーネ。もしソロアが聞いたら・・・・」
「俺はここにいるしさっきの会話をばっちり聞いたぜ！」
「あわ、あわ、あわ」
エリスは顔を真っ赤にして慌てている。
それを見たアエスタはあきれ半分おもしろ半分のような態度でゴリラのライフを砕く。
暗黒神ボンバー

ライフ　2→1
「くっ、気をとり直して。続けアエスタ！」
「ライフで受ける！」
暗黒神ボンバー
ライフ　1→0
「強い女もまたいいとのことでございます」
ゴリラは爆発した足場に巻き込まれてバトルフィールドから抜け出した。
「宇宙には覚悟のない男は邪魔」
バトルフィールドから出たゴリラは素直に負けを認めた。
「銀河バトスピ法には逆らえません」
「ならゴリラ俺と勝負しようぜ。
勝てばUクリスタルもそうだなエリスはダメでも、
あそこのレイとかいうやつの恋人なら・・・」
「私はまだレイの恋人でもないし、なんで勝手に私の身柄が賭けに使われてるの!?」
「そうだな勝手はいけないよな。てことでレイとやらその子賭けに使ってもいいか？」
「べつにいいぜ。その代り負けることは許さねえからな、なにせ俺のライラだからな。
あともう一つ、あとで俺とバトルしてくれよそれで許してやる、どうだ？」
「ＯＫ、乗った」
『ならそのかけ我も乗らしてもらおう』
突如声が聞こえたと思うと巨大なアルティメットクリスタルがもう１つ現れた。
「また、アルティメットが!?」
「何者か知らないが来い俺のデッキに！」
ためらう必要などどこにある、一緒に戦いたいと言っているんだ。
期待にはできる限りで答えないとな。

新たなアルティメット　深緑の一太刀！

「あなた様はこの星のもう一人の神、なぜそのような男に手を貸すのですか!?」
　ゴリラの肩で五月蠅く鳥が問いだした。
「今まで見守ってきたがお前たちの行動が目に余るからだ」
「どのような点がですか!?」
「暗黒神ボンバー、貴様の欲にまみれた行動がだ！」
「ウホッ!!??」
　ゴリラは自分が悪いなんて全く思ってなかったのだろう。
　自分が話題に出てきたことに驚いている。
「この星に入った女子を襲うとはそれが神のやることなのか？」
「ウホォ・・・」
　みた感じしょげているようだ。
「だがこれは我の意見にすぎぬ、神には規則などない」
「ウホォ！」
「だがしかし我の目に余るのも事実、
　だからこそここはバトスピで自分の意見を押し通してみろ！」
「ウホォ!!!!」
　ゴリラはやる気を出したようだ。
「話は終わっただろ、さっさと始めようぜ。ゲートオープン解放！」
　二人の体はバトルフィードルに飛ばされる。
　ついでに観客たちも応援席に飛ばされる。
　今回の俺の服装は武士のような鎧に身を包んでいた。
　ライフは肩の鎧についている。
「先行は俺がもらう」
　手札は、Uカイザーアトラス、ブレイドジー、蜂王フォンニード、命の果実。
「スタートステップ、ドローステップ、メインステップ」
　ドローしたカードは絶甲氷盾。
（まぁ、悪くはないな）

「俺はネクサス、命の果実を配置、これでターンエンド」
ソロア
ライフ　５
リザーブ　０
トラッシュ　４
フィールド
命の果実　ＬＥＶＥＬ１
手札　４枚
「ウホォ！」
「スタートステップ！コアステップ、メインステップ！ヤンオーガを召喚しアタック！」
「ライフで受ける！」
ソロア
ライフ　５→４
「この瞬間、命の果実の効果を発揮！デッキから１枚ドロー」
ソロア
手札　４→５
「これで私はターンエンド！」
暗黒神ボンバー
ライフ　５
リザーブ　０
トラッシュ　４
フィールド
ヤンオーガ　ＬＥＶＥＬ１（１）
手札　４枚
「俺のターン！ゴマダラを召喚！コアブースト！」
手の中に現れたコアをゴマダラに叩き付けるように置く。
「さらに命の果実をＬＥＶＥＬを２にし、ターンエンド」
ソロア
ライフ　４
リザーブ　０

トラッシュ　２
フィールド
ゴマダラ　ＬＥＶＥＬ１（１）
命の果実　ＬＥＶＥＬ２（３）
手札　５
「私のターン！カッチュウムシを召喚しバーストをセット、ヤンオーガのＬＥＶＥＬ３にあげます」
「ウホォ！」
「アタックステップ！カッチュウムシでアタックします！」
「ライフで受ける」
ソロア
ライフ　４→３
「命の果実の効果発揮、１枚ドローそしてコアブースト」
ソロア
手札　５→６
リザーブ　１→０
「これでターンエンドです！」
暗黒神ボンバー
ライフ　５
リザーブ　０
トラッシュ　０
フィールド
カッチュウムシ　ＬＥＶＥＬ１（２）
ヤンオーガ　ＬＥＶＥＬ３（４）
手札　２
「深緑のターン、俺はゴマダラをさらに召喚。召喚時効果により合計２コアブースト！」
「バースト発動です！」
「ウホォ!!」
「武迅衝！あなたのゴマダラを１体披露し、フラッシュ効果によりコアブーストです」

「だがこれで場はあったまったぜ！さぁ皇帝よ、その一太刀ですべての敵を殲滅せよ！」
場にカードを置いた瞬間、フィールドの外から激しい羽音が聞こえてくる。
「さぁ、開戦だ。思う存分暴れてこい、カイザーアトラス！」
羽音の正体はカイザーアトラスがこちらへ飛んでくる音だった。
「なんだあれ!!俺のキングタウロスよりデケー！」
確かにでかいゴマダラが虫けら同然に見えてしまうぐらいデカい。
「いくぜ、アタックステップ！カイザーアトラス、Uトリガーロックオン！」
大太刀を振るった衝撃で相手のデッキの上のカードがめくれる。
「コスト3、タフネスリカバリーです」
「ヒット！」
「ウホォ！」
めくられたカードは弾かれるようにトラッシュに落ちていく。
「お前のスピリットを3体披露させる！」
大太刀の衝撃波はヤンオーガとカッチュウムシを動けなくする。
「ライフを1つ貰い受ける！」
「ライフで受けます！」
暗黒神ボンバー
ライフ　5→4
「さらにゴマダラでアタック！」
「ライフで受けます！」
ライフ　4→3
「俺はこれでターンエンドだ」
ソロア
ライフ　3
リザーブ　0
トラッシュ　5
フィールド
アルティメットカイザーアトラス　ＬＥＶＥＬ３（１）

ゴマダラ　ＬＥＶＥＬ１（１）
ゴマダラ　ＬＥＶＥＬ１（１）
命の果実　ＬＥＶＥＬ１（０）
手札　５
「私のターン！バーストをセットし、
オウゴンオニクワガーを召喚、さらにシマリースを召喚」
「手札を使い切ったか」
「ねぇ、レイ大丈夫だよね？」
どうやら観客席のライラは不安なようだ。
「おいおい、まるで俺が負けそうみたいじゃねーか」
「いいや、俺は信じてるぜ。お前は絶対に勝つ！」
「当たり前だ俺は絶対に勝つ！」
「ウホォ！ウホォー!!」
ゴリラは自分がのけ者にされてるのが気に食わないようだ。
「行くのです、オウゴンオニクワガー」
金色のクワガタがこちらに迫ってくる。
「アタック時、コアブーストです」
暗黒神ボンバー
リザーブ　０→１
「さらに最初のアタックなので回復します！」
「ライフで受ける！」
ソロア
ライフ　３→２
「命の果実の効果でドロー！」
ソロア
手札　５→６
「さらにオウゴンオニクワガーでアタックです！」
暗黒神ボンバー
リザーブ　１→２
「あまり調子になられても困るんだよな。フラッシュ！」
「何が来るのですか!?」

「神速召喚!ブレイドジー、そのままブロックだ」
オウゴンオニクワガー　ＬＥＶＥＬ２　ＢＰ４０００
ＶＳ
ブレイドジー　ＬＥＶＥＬ１　ＢＰ１０００
「ブレイドジーは破壊される」
「驚かせてくれましたね。
ですがまだあなたの負けは揺るいでいませんよ!カッチュウムシ!」
「ウホォ!!」
「ライフで受ける」
ソロア
ライフ　２→１
「命の果実の効果でドロー」
ソロア
手札　５→６
「とどめです!ヤンオーガアタックです!」
「フラッシュタイミング!ストームアタック!起き上がれゴマダラ」
突如ふいた風はシマリースをひざまずかせ、ゴマダラに反逆のチャンスを与える。
「効果によりシマリースには寝といてもらうぜ。ブロック!」
ヤンオーガ　ＬＥＶＥＬ３　ＢＰ５０００
ＶＳ
ゴマダラ　ＬＥＶＥＬ１　ＢＰ１０００
「ゴマダラは破壊される」
「まさか土壇場で逆転の一手を引いたと!?」
「さぁ?」
「ターンエンドです!」
暗黒神ボンバー
ライフ　３
リザーブ　２
トラッシュ　２

フィールド
ヤンオーガ　ＬＥＶＥＬ３（４）
シマリース　ＬＥＶＥＬ１（１）
オウゴンオニクワガー　ＬＥＶＥＬ２（３）
カッチュウムシ　ＬＥＶＥＬ１（１）
手札　０
「深緑のターン！蜂王フォンニード召喚！そして召喚時効果によりコアブースト！」
　手の中の３つのコアをたたきつけるようにフォンニードに置く。
「Ｕカイザーアトラスをレベル４にアップ、
　アタックステップ！フォンニードでアタック！」
「ライフです！」
　暗黒神ボンバー
　ライフ　３→２
「フォンニードの効果発揮！自身のコアを３つトラッシュに置くことで回復！」
「そんな!?」
「自身の夢がついえるさまをとくと味わいな。アタック！」
「ライフで受けます！」
　暗黒神ボンバー
　ライフ　２→１
「ライフ減少後バースト発揮です！始甲帝！」
「何！」
「あなたのゴマダラを披露させます！」
「ウホォ!!!」
　始甲帝の着地の衝撃でゴマダラは膝をついてしまう。
「なんで、アルティメットを披露させなかったんだ？」
「あっ」
「まぁ、いいか。やれＵカイザーアトラス」
「コスト７カーンウルフです」
「ガードだと!?」

「よくやりました始甲帝でブロックです！」
Ｕカイザーアトラス　ＬＥＶＥＬ４　ＢＰ２００００
ＶＳ
始甲帝　ＬＥＶＥＬ２　ＢＰ１５０００
「まったく、ひやひやしたぜ」
「何を世迷言をもうあなたにアタックできるスピリットはいませんよ！」
「Ｕカイザーアトラスのレベル４効果を発揮！」
カイザーアトラスの太刀は始甲帝を一刀両断しさらにゴリラのところまで振り下ろされる。
「こいつがアタック時バトルで勝利すると相手のライフを１つ貰い受ける！」
「そんなー!!」
「ウホォー!!???!!」
暗黒神ボンバー
ライフ　１→０
「これぞ、深緑の力！立ちふさがる者すべてを断つ！」

アルティメット使いＶＳアルティメット使い　白と赤の衝突

「どうだゴリラ。俺はお前なんかには負けないぜ」
「ウホォー！」
悔しそうにゴリラは大地をたたく。
「さすがじゃねーか、ソロア！」
「当たり前だ、人様の彼女をかけに出したんだ勝って当然だ！」
俺とレイはハイタッチした。
「さて、気を取り直して、ターゲット！」
レイがデッキを構えるとレイのデッキが光りだし、それに反応した俺のデッキも光り始める。
「連戦になるとわな」
俺もデッキを構える。
「行くぜムゲン！」
「ほい、キター！」
レイの近くを飛んでいたチビドラがカードになりレイのデッキに入る。
「お前を燃やす色は赤だ！」
「「ゲートオープン、解放！」」
二人は掛け声とともにバトルフィールドへと飛ぶ。
バトルフィールドに立ったレイは服装どころか髪の色まで変わっていた。
「レイ、お前は緑ではいかないのか？」
「お前こそ緑で行かないのか？」
「いいや、今回は白でいかせてもらう」
今回、俺は白を使うことにした。
初めての対アルティメット戦。
なら同じアルティメットで様子を見るのが先決だろう。
「白だろうとなんだろうと俺は燃え盛るようなバトルをするだけだ

！」
あれ、なんかあいつ性格、変わってないか？
「先行はもらうぞ」
俺は戸惑いながらも先行をとる。
「俺はビームアラシを２体召喚！」
自分の場に機械仕掛けのハリネズミが２体現れる。
「俺はこれでターンエンド」
ソロア
ライフ　５
リザーブ　０
トラッシュ　１
フィールド
ビームアラシ　ＬＥＶＥＬ１（１）
ビームアラシ　ＬＥＶＥＬ２（２）
手札　３
「灼熱のターン！こい、エッジウルフ」
レイの場に赤と黒で彩られた狼が現れる。
「アタックステップ！エッジウルフでアタック！」
「ライフで受ける」
ソロア
ライフ　５→４
「これでターンエンドだ！」
灼熱のゼロ
ライフ　５
リザーブ　０
トラッシュ　３
フィールド
エッジウルフ　ＬＥＶＥＬ１（２）
手札　４
「俺のターン、スタートステップ、ドローステップ、コアステップ、リフレッシュステップ」

トラッシュからコアがリザーブに戻る。
「メインステップ、イグアバギーを召喚、さらにネクサス、ナウマンシティを配置」
俺の後ろに要塞都市が出現する。
「配置時効果により、手札から白のスピリット1体をを召喚」
要塞都市から白銀の機構獅子が飛び出てくる。
「獅子座より来たれ、誇り高き白金の獅子、獅機龍神ストライクヴルム・レオ召喚！」
フィールドに降り立った白金の獅子は獅子座の紋章と共に雄たけびを上げる。
「維持コストは、ビームアラシから確保」
コアを取り除かれたビームアラシは光となって消える。
「そしてバーストをセット、ターン終了」
ソロア
ライフ　4
リザーブ　0
トラッシュ　2
フィールド
獅機龍神ストライクヴルムレオ　ＬＥＶＥＬ１（１）
イグアバギー　ＬＥＶＥＬ１（１）
ビームアラシ（１）
手札　0枚
「灼熱のターン、てっ、ムゲン！お前、若干、パワーダウンしてねーか？」
「すまないなゼロ、まだ進化が安定してないみたいなんだ」
「だが、これでもいいかもしれないぜ！こいエクスムゲンドラ！」
真っ赤な鎧を身に着けたチビドラゴンが現れる。
「アタックステップ！エクスムゲンドラ、アタックだ」
チビドラゴンがこちらにむかって走ってくる。
「アタック時効果により1枚ドロー」
「ブロックだストライクヴルムレオ！」

エクスムゲンドラ　ＢＰ３０００
ＶＳ
獅機龍神ストライクヴルム・レオ　ＢＰ６０００
「フラッシュタイミング！バスターファランクス、ムゲンのＢＰを＋４０００！」
「なに!?」
エクスムゲンドラ　ＢＰ７０００
ＶＳ
獅機龍神ストライクヴルム・レオ　ＢＰ６０００
「ストライクヴルム・レオは破壊されるがバースト！幻影氷結晶！」
ストライクヴルム・レオが手札に帰ってくる。
「バースト発動時に破壊されたスピリットを手札に」
「俺はこれでターンエンドだ！」
灼熱のゼロ
ライフ　５
リザーブ０
トラッシュ　４
フィールド
エクスムゲンドラ　ＬＥＶＥＬ２（２）
エッジウルフ　ＬＥＶＥＬ１（１）
手札　４枚
「俺のターン！もう1枚、ナウマンシティーを配置！」
２つ目の城塞都市が出現する。
「もう一度、現れよ。月の光よ照らせ！大いなる獅子の誇りを！獅機龍神ストライクヴルム・レオ」
再び獅子座のスピリットが大地を踏みしめる。
「アタックステップ！ストライクヴルム・レオ！」
「ライフで受ける！」
灼熱のゼロ
ライフ　５→４
「俺はこれでターンエンド」

ソロア
ライフ　４
リザーブ　０
トラッシュ　２
フィールド
獅機龍神ストライクヴルム・レオ　ＬＥＶＥＬ２（２）
イグアバギー　ＬＥＶＥＬ１（１）
ビームアラシ　ＬＥＶＥＬ１（１）
要塞都市ナウマンシティー　ＬＥＶＥＬ１（０）
要塞都市ナウマンシティー　ＬＥＶＥＬ１（０）
手札　０枚
「灼熱のターン！エクスムゲンドラのスピリットソウル発揮！」
　エクスムゲンドラのシンボルが１つ増える。
「燃えろ、灼熱の龍！アルティメットジークフリード召喚！」
　大地が割れ炎が噴き出、金色をまとった赤い竜が現れた。
「アルティメットジークフリード、アタックだ！」
　紅い竜は大地を踏みしめこちらに迫ってくる。
「アルティメットトリガーロックオン！」
「コスト2、ミストバラッジ！」
「ヒットだ！これでお前はスピリットで強制ブロックだ！」
「イグアバギー、ブロックだ」
イグアバギー　ＬＥＶＥＬ１　ＢＰ１０００
ＶＳ
アルティメットジークフリード　ＬＥＶＥＬ４　ＢＰ１３０００
「相手スピリットにブロックされたら、ライフ１つを破壊する！」
「それがそのアルティメットの能力か！」
ソロア
ライフ　４→３
「だが、ただでは倒れないぜ！ストライクヴルム・レオの効果発揮！」
　白金の獅子が立ち上がる。
「光導・聖魂を持つスピリットが疲労したとき回復する」

イグアバギーはアルティメットジークフリードに踏まれ破壊される。
「俺はこれでターンエンド！」
灼熱のゼロ
ライフ　４
リザーブ　０
トラッシュ　３
フィールド
アルティメットジークフリード　ＬＥＶＥＬ４（３）
エッジウルフ　ＬＥＶＥＬ１（１）
エクスムゲンドラ　ＬＥＶＥＬ１（１）
手札　４
「俺のターン！リーディングオリックスを召喚」
機械仕掛けの鹿が現れる。
「さらにストライクヴルム・レオのＬＥＶＥＬを３にアップ」
まってろよ、すぐにでもお前を戦場に立たせてやる。
「アタックステップ！いけ、ストライクヴルム・レオ！」
「ライフで受ける！」
灼熱のゼロ
ライフ　４→３
「これでアタックステップを終了する。そしてリーディングオリックスにより１枚ドロー」
ソロア
ライフ　３
リザーブ　０
トラッシュ　１
フィールド
獅機龍神ストライクヴルム・レオ　ＬＥＶＥＬ３（４）
リーディングオリックス　ＬＥＶＥＬ２（２）
ビームアラシ　ＬＥＶＥＬ２（２）
要塞都市ナウマンシティー　ＬＥＶＥＬ１（０）

要塞都市ナウマンシティー　ＬＥＶＥＬ１（０）

手札　１

決着　紅白の激闘

「灼熱のターン！ディフェンザードを召喚！」
　機械仕掛けの小さな竜が現れる。
「白のカードだと？」
「さらにエクスムゲンのＬＥＶＥＬを２にアップ！」
　今まで、赤のカードしか使っていなかったのに白？
「いけ、アルティメットジークフリード！Ｕトリガーロックオン！」
「コスト６　月光龍ストライクジークヴルム！ガードだ！」
「なに!?」
「そのアタック、ライフで受ける！」
　ソロア
　ライフ　３→２
「さぁ、どうする？」
「これでターンエンドだ！」
　灼熱のゼロ
　ライフ　３
　リザーブ　０
　トラッシュ　２
　フィールド
　アルティメットジークフリード　ＬＥＶＥＬ４（３）
　エクスムゲン　ＬＥＶＥＬ２（２）
　ディフェンザード　ＬＥＶＥＬ１（１）
　エッジウルフ　ＬＥＶＥＬ１（１）
　手札　４
「俺のターン！そろそろだな」
　手札から白き黄金の巨人を抜き取る。
「黄金の巨人よ、その巨槌で退路を切り開け！」
　バトルフィールドめがけて白銀の巨槌となったトールを投げる。
「召喚！究極巨神アルティメットトール！」
　雷共に黄金の巨人が降り立ち投げられた巨槌を受け止める。

「きやがったな、それがお前のアルティメットか！」
「維持コスト確保のためにリーディングオリックス以外をすべてＬＥＶＥＬ１にダウン」
リーディングオリックス以外からコアが抜き取られトールに集まる。
「行けトール！Ｕトリガーロックオン！」
「コスト４、ウィングソルジャー！」
「ヒットだ。これにより、お前はスピリットではブロックできない」
また白だと？
「ライフ！」
灼熱のゼロ
ライフ　３→２
「アタックステップ終了とともにリーディングオリックスの効果を発動」
手札　１→２
「そしてターンエンド」
ソロア
ライフ　２
リザーブ　０
トラッシュ　３
フィールド
究極巨神アルティメットトール　ＬＥＶＥＬ４（２）
リーディングオリックス　ＬＥＶＥＬ２（２）
獅機龍神ストライクヴルム・レオ　ＬＥＶＥＬ１（１）
ビームアラシ　ＬＥＶＥＬ１（１）
城塞都市ナウマンシティー　ＬＥＶＥＬ１（０）
城塞都市ナウマンシティー　ＬＥＶＥＬ１（０）
手札　２
「灼熱のターン！ブロードファルコンを召喚！」
「また白、お前は何を考えてるんだ？」
「それをこれから見せてやるんだよ！」

手札から1枚カードを抜きだす。
「灼熱の牙！鋼の魂！最強の名を俺は呼ぶ！」
フィールドから火柱が出現し中から黄金の龍が姿を現す。
「アルティメットジークフリーデンの雄姿に惚れてみろ！」
「2カラーアルティメットだと!?」
「いくぜ！Uトリガー　ロックオン！」
「コスト3　エグゾーストエンド」
「ヒットだ！」
3つの火柱がスピリットを焼き払う。
「ヒットしたカードのコスト1につきBP10000以下の相手スピリットを破壊だ！」
「そのアタックライフで受ける！」
ソロア
ライフ　2→1
「行けジークフリード！」
「コスト2　幻影氷結晶！だがトリガーカウンターだ！」
「トリガーカウンターだと!?」
「効果によりライフを回復させそのトリガーをガード。さらに勇星鎧レオ・ミノル召喚！」
「だが、俺にはまだ3体もスピリットが残ってる」
「ライフで受ける！」
ソロア
ライフ　1→2→1
「いけ、相棒！」
「この瞬間、アルティメットトールの効果が発揮！トールは回復する」
「なに!?」
「トールでブロック！」
究極巨神アルティメットトール　LEVEL4　BP15000
VS
エクスムゲンドラ　BP1000
トールの雷槌がムゲンを打ち上げる。

「トールはＬＥＶＥＬ２以下のスピリットがアタックしたとき回復する」
「つまり、数で押すということができないと？」
「そう言うことだ」
「ターンエンド！」
灼熱のゼロ
ライフ　２
リザーブ　０
トラッシュ　３
フィールド
アルティメットジークフリーデン　ＬＥＶＥＬ４（３）
アルティメットジークフリード　ＬＥＶＥＬ３（１）
エッジウルフ　ＬＥＶＥＬ１（１）
ディフェンザード　ＬＥＶＥＬ１（１）
ブロードファルコン　ＬＥＶＥＬ１（１）
手札　３
「俺のターン、フェイタルドローを使用」
俺は引いたカードを見る。
「準備は整った、バーストセット！
ネクサス　要塞都市ナウマンシティーを配置」
さて、このターンで決めきれなければ俺の負けだ。
「全力で獲りにむかうぞ！」
ナウマンシティーの効果が発揮される。
「配置したネクサスの効果により手札からエンタープライズ召喚！」
要塞都市から空母が出撃する。
「さらにレオ・ミノルをエンタープライズにブレイヴ」
子獅子がエンタープライズに乗り込む。
「アタックステップ！トール！Ｕトリガーロックオン！」
「コスト０　ファイザード！」
「ヒット、これでアルティメット以外はブロックできない！」
「それを待ってたぜ！手札のアルティメットオーディーンを破棄！」

相手の手札にあったアルティメットオーディーンが赤い炎に焼かれる。
「これにより、ジークフリーデンは回復するぜ！」
「そんな能力まで持っているのか!?」
「だがそのアタックライフで受ける！」
灼熱のゼロ
ライフ　2→1
「エンタープライズでアタック！」
「ジークフリーデンブロックだ！」
甲竜戦艦エンタープライズ　ＬＥＶＥＬ２　ＢＰ１２０００
ＶＳ
アルティメットジークフリーデン　ＬＥＶＥＬ４　ＢＰ２００００
エンタープライズは次々と爆撃を行うが
ジークフリーデンはものともせず、ブレスで敵を破壊した。
「バースト発揮！魔星機神ロキ！」
鋼鉄の巨人はエッジウルフ、ブロードファルコン、ファイザードを次々と凍らせていく。
「ロキのバースト効果により、コスト合計８まで相手スピリットをデッキに戻す」
「これで俺の場のブロックできるスピリットはゼロ」
「これでとどめだ！」
「ライフで受ける！」
灼熱のゼロ
ライフ　1→0
「レイ、良いバトルだったぜ！」
「こっちこそだ！」

一番星と流れ星の激突

バトルフィールドから出るとレイが握手を求めてきた。
「バトルが終わったんだ。もうお前は俺のマジダチだ！」
「マジダチになった記念に握手か」
その手を握り握手を交わす。
「こんな俺で務まるならどんとこいだ！」
「次会うときは俺が勝つ！」
「いいや、また俺が勝たせてもらう！」
「なら次は第二階層で会おうぜ！」
「わかった」
俺たちはハイタッチを決めお互いに自分の船まだ出歩いていく。
「白のアルティメットを所持していることは知っていたが
目の前でアルティメットをとられるというのは少し悔しい部分があるな」
エリスは少し悔しそうに拳を握りしめる。
「お前ならきっといいアルティメットにであるさ」
俺はそう言い船まで歩いていく。
「待ってくれソロア！」
「なんだ？」
「もし、第二階層まで行くならそこで私とバトルしてくれ！」
「今じゃなくていいのか？」
「あぁ、今の私では君に勝てないような気がする」
「そうか、俺はエリスと戦っても五分五分程度だと思ってるが？」
「君が思っているほど私は強くない」
「そうか」
「だから次会うまでに私は君と対等以上に戦えるようになる！」
彼女の眼は覚悟で満ち溢れていた。
「そこまで言うならいいぜ。次会うときはお前が俺に勝てることを期待しているぜ」
「あぁ、きっと目に物を言わせてやるさ」

そしてエリスは船へと帰って行く。
俺は船へと歩いていく。
するとデッキの中のトールが話しかけてきた。
『私は、3体まで限界だと言ったはずだぞ？』
「べつにいいじゃねーか、あと1体は使役できる」
『巨神よ、われでは不満か？』
突如、カイザーアトラスが会話に入ってきた。
『そういう意味ではないのだがもう少し慎重に選べと言いたいのだ』
「そうか」
『ひとくくりにアルティメットとは言ってはいるが中には大したことのないアルティメットも存在する』
「アルティメットってみんなすごいカードじゃないのか？」
『いいや、中には不足コストの支払いは任せろみたいなことを言うアルティメットだって存在するのだ』
「なんて自虐的なアルティメット」
『とにかく、今度からは慎重に選べ』
「わかったよ」
船へと乗り込みデッキをセットする。
「とりあえず、すぐ近くに第二階層へと続くゲートがあったな」
船を操作し浮上させる。
「目指すは第二階層いきのゲートだ」
船は目的地へ向けて進んでいく。
そして第二ゲートにたどり着く。
ここではデッキ審査が行われる。
『これよりデッキ審査を行います。カードセッターに出来をお入れください』
「それではどーぞ」
カードセッターに緑のデッキを入れる。
『合格です！なかなかいいデッキでした！』
「ありがとよ」
デッキ審査を終え、ゲートの中へと入って行く。

『主よ』
「なんだ、トール？」
『アルティメット使い同士が衝突している』
「どこで？」
『すぐ近くだ。戦っているのは一番星とギルドであった青髪の少年だ』
「すぐにむかうぞ」
　船を進めると途中で観客席へとワープさせられる。
「うわぁ、あなたは」
「なんだレイの彼女か」
「まだ違いますよ！」
　フィールドを見るとバトルフィールドに浮遊する緑のレイと静かにたたずむ青髪の少年がいた。
「オォ、来てくれたのかマジダチ！」
「たまたま通りかかったらアルティメット使いがバトルしているんだ見にいかなきゃ損だろ」
「それじゃ、見ていてくれ俺の雄姿！」
　レイは空を自由自在に飛んでいる。
「貴様はギルドにいた謎の男」
「謎の男はやめてくれ。俺にも名前はある」
「そうか、それは悪い」
「俺の名はソロア・サジタリアス、覚えていてくれ」
「俺の名はキリガだ。お前の事はミロクから生け捕りにしろと言われているからな一番星との勝負が決まれば次はお前の番だ」
「獲らぬ狸の皮算用って言葉知っているか？」
「まずは目の前のことに集中しろと言っているのか？」
「まぁ、言いたいことはそんな感じだ」
「ならば私の力をみせよう。クォーツ・ゴレムを召喚」
　キリガの場にクォーツゴレムが召喚されたことにより場の青のシンボルの数が５つになった。
「時は来た、天にそびえる城塞、大地も砕くその威容、降臨せよ！アル

テイメットキャッスルゴレム！」
浮遊するキリガの足場がその拳を地面に振り下ろすことによりそこから黄金の巨兵が現れる。
巨兵が腕を振るうと黄金の中から青色のボディーが現れた。
「おぉ、会いたかったぜキャッスルゴレム！」
「あれ奴のアルティメット・・・」
「青き城塞よ打ち砕け！アルティメットトリガーロックオン！」
キャッスルゴレムは両の掌を打ち付けるとその衝撃波がレイのデッキをめくる。
「コスト５」
「ヒット！」
「そよ風ほどにも感じないぜ」
「ヒットしたカードのコスト１につきデッキからカードを３枚破棄」
あのアルティメット、色が青だという時点で俺はうすうす効果は読めたがそれほどの効果とわ。
「んーと、何枚だ？」
レイが指で枚数を数えている間にレイのデッキからカードがトラッシュに落ちていく。
「５×３で１５枚」
「おぉ、これは大風だ！ゴォーッときたぜ！」
「これであいつのデッキは残り１７枚」
「ゼロのがゼロになると負けちゃいまーす」
「ん？ゼロ？今戦ってるのはレイだろ？」
「あいつはバトルフィールドに立った時はゼロって名乗ってるのほらいつもと微妙に性格が違うでしょ」
「そういえば」
バトルフィールドに立っている時だけ名乗りを変えるか・・・。
「ライフだ！」
疾風のゼロ
ライフ　５→４
「なんていい風なんだ！」

「なんというかあれだよなあいつ」
「言いたいことはよくわかるから言わなくていいわよ」
「いや、強敵と戦っていて喜ぶのは分かるけどさ」
「言わないで聞きたくない」
「あいつドMなんじゃないのか？」
「言っちゃった」
「ターンエンド」
流星のキリガ
ライフ　1
「だいぶ薄くなったな。だが俺の風は止まらないぜ！疾風のターン」
ゼロは風を巻き起こし上空へと飛びあがって行く。
「早くもっと早く、ゴォー追い風だ！王者の威厳　大地の息吹　緑の風で命をはぐくめ」
あいつアルティメットを出すつもりか。
「アルティメットキングタウロス！ビュォーワ」
あれがあいつの緑のアルティメット。
「それがお前の新たなアルティメット」
「こいつは俺を選んでくれたのさ。可愛いマジダチだ」
『御託はいいからさっさと攻めろ！血が騒いでたまらねーぜ！』
「よし初陣だ。キングタウロス！アルティメットトリガーロックオン！」
「コスト6」
「ヒット！お前のスピリット2体を披露、選べ！」
「クォーツゴレム2体」
アルティメットキングタウロスの槍の矛先から出た雷がクォーツゴレム2体を披露させる。
「マジック　ブレイクグラインド、レディバド2体を破壊」
青の閃光が地面を伝いレディバド2体を破壊する。
「4枚破棄」
「チン！残り12枚」
「クォーツゴレムでブロック」

「これで11枚」
「クォーツゴレムがバトルするとき相手のデッキを1枚破棄」
キングタウロスはクォーツゴレムを槍で突き刺し破壊する。
大丈夫あいつ、次の一撃次第でデッキがなくなるぞ。

決着　一番星ＶＳ流れ星

「ターンエンド」
　レイはターンを終了する。
「やるな流れ星」
「お前のデッキはあと11、次のターン持ちこたえれまい」
「確かに風は逆風だ。だが勝負は最後まで分からない」
　あいつ強気なはいいが余裕ぶってる場合でもないぞ。
「流星のターン、青き城塞よ叩き潰せ」
　Ｕキャッスルゴレムがレイへと歩を進めていく。
「Ｕトリガーロックオン」
　この一撃が勝敗を分けるだろう。
　さて何が出るか。
　自分の勝負でもないのに口元が吊り上がる。
「ヒット」
　運命の引き金が姿を見せる。
「だがコスト1だ」
　ヒットしたカードはレディバド。
　レイのデッキが3枚破壊される。
「これで残り7枚」
「さらにネクサスの効果で4枚」
　さらにデッキが4枚破壊される。
「これでのこり3、次はないぞレイ」
　Ｕキャッスルゴレムの槍がレイめがけて飛んでいく。
「ライフだ」
　疾風のゼロ
　ライフ4→3
「あいつがこのターンで決めきれないのならキリガに軍配は上がるだろう」
　奇跡はそう何度と助けてはくれない。
「疾風のターン」

これで残り2枚。
「速く、もっと速く、天まで突き上げろキングタウロス！」
Uキングタウロスが天に突き上げた槍は嵐となりキリガのデッキを襲う。
「無駄だ一番星」
嵐はキリガのデッキのトップをめくる。
「コスト3」
「クリティカルヒット！」
あいつのアルティメットもクリティカルヒットを持っていたのか。
「トラッシュに置いたカードがコスト3以下の時、相手のライフを1つリザーブに置く」
「何!?」
キリガのライフが砕けちる。
キリガ　ライフ1→0
「みたか！俺の雄姿！」
「あぁ、バトルの熱がこちらにまで伝わってきたよ」
「ならバトルするか？」
「いいや、また今度にしよう」
俺が踵を返し帰ろうとするとキリガが呼び止める。
「まて、サジタリアス」
「なんだ、俺とバトルでもするか？」
「そのような部様な真似はしない」
「なら何の用だ？」
「受け取れ」
キリガがこちらにカードを投げてきた。
それを受け取り確認すると霊峰魔竜ヤマタノヒドラだった。
「何の真似だ？」
「貴様からこのカードをもらったからな」
キリガはデッキから1枚カードを取り出し見せる。
それは初めて会った時に渡した光輝龍神サジットアポロドラゴンだった。

「おまえ、それは青のデッキ破壊のデッキだろどうして」
「何、気まぐれさ。そして俺はまた気まぐれでそのカードをお前に渡そう」
「なら受け取っておく」
カードをデッキにしまう。
「次合うときは一番星も貴様も逃しはしない」
彼の眼から熱き魂の炎が確認できた。
「なら次は持てる力のすべてでお前を返り討ちにしてやるよ」
俺たち3人は口元を緩めその場を立ち去った。

「さーて、いつぶりのシャバだリブラ?」
「タウラス、貴様また酒を飲んでいるのか」
「俺にとっては酒は宇宙船の燃料みたいなもんなんだよ」
星の書物よりいでし2人の男は外へと歩き出す。
後ろには無残にも倒れている老人がいた。
「私たちの目的はサジタリアスを連れ戻すこと」
「わかってるよ、だが俺はあいつも簡単に連れ戻す気はないぜ」
「そうですね、彼は長くネイクスに封じられていた」
「わかってるじゃねーか」
「それにサジタリアスがおとなしく帰ると思いますか?」
「ありえねーだろ」
二人は近くのガラクタに手をかざすと両手に抱え込むようなしぐさをした。
するとがらくたが集まり簡易な船が完成する。
すると二人は船に乗り込みその星を出発した。

「ミロク、新たな星が宇宙へと出た」
「いて座といい、自分勝手な連中だね」
ミロクの周りを這うように巨大な蛇が動き出す。
「少し手を打つべきか」
「あの書物はすぐに取りに行かせるかい?」

「いや、新たに出た星は2体、それぞれに偵察部隊を送るだけでいいだろう」
「わかったよ」
我一番と光る星はこの宇宙に何を運ぶのか。